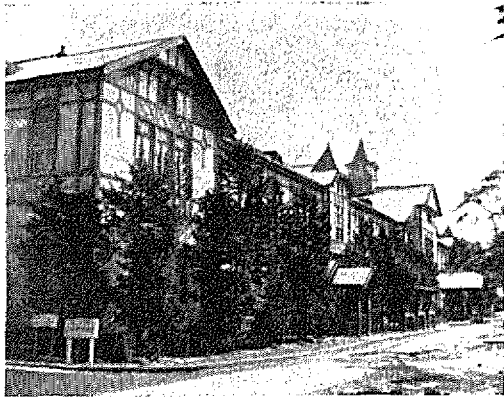


Feb.1958

東北大学医学部薬学科





巻頭言

我々は入学以来、不安と期待とを持って眼前の漠然たる可能性と対決するたびに、そこに多くの問題があり、又我々自身の中にも多くの問題が含まれていることを知った。そして教養部に於ける生活を体験して見て多かれ少なかれ期待を裏切る大学生活を発見し、同時に我々の生活態度の底の浅さ、内容の乏しさを痛感した。又いまだにかつての動揺した気分から脱け切っていない我々は本質的な問題に立入る前に、現在或は未来に確信を持つことが出来ず、絶えず混沌とした状態にあることは否定し得ない。しかし、西風が吹けば東になびき、北風が吹けば南になびくスキの群とはおのずから違う筈である。そして実際、我々はこの混沌とした状態から何物かを得、何物かを作り上げるべく努力した。その結果、我々の個々が先ず自己の問題と対決し、新たな自覚を持ち、それが全体のものとして統一された時、はじめて共通の本質的な問題が我々によって取り上げられるであろうことを知った。

我々には我々の自由を束縛する伝統がない。先輩もない。自由ではあるが、実に苦しい立場であり、種々の点で我々は混迷せざるを得なかった。しかし諸設備も次第に整えられるであろうし、医学部の諸先生方にも懇切な御指導が頂けるだろう。だがやるのは我々なのだ。確かに我々はまだ小さい。けれども卵は卵なり、ひよこはひよこなりの物の見方をもっている。

そして共通な目的をもつものが自己の考え、感想を發表し、相互の理解を深める「場」とも云うべき「あみこす」こそは偽らぬ薬学科の反映であり、今日我々が自己を反省する良き材料でもあると信じて疑わないのである。

(編集部)

目次

第一回生の任務	医学部長 武藤 完雄	2
薬学科の組織及び学科課程について	相沢 正作	2
発刊を祝して	池田 米繁	3
医学と薬学	医学部教授 本川 弘一	4
薬と鲁迅	野尻 務	4
雑感	医学部助教授 森 富	5
研究室入門	薬学科助手 岩口 孝雄	6
市河三喜博士と児島喜久雄先生	三岡 弘道	7
みち	薬学科教授 一色 孝	8
年頭所感	水野 左敏	8
無題	柳瀬 良文	9
フォークダンスをして	長浜 昇	10
一ふるさと一		
阿波・伊豆	福島英明・中村善次郎	11
<hr/>		
印象・断片—Extracted—		12
<hr/>		
十七音の戯れ	昼屋丁兵衛	14
走り書き—四月の思い出	林 春江	14
思うことなど	草野源次郎	16
十和田印象記	中野 卓雄・引地 学	17
一趣味一		
酒・碁	酒井 格一・小野寺 威	18
蜂の巣	水柿 道直	19
お山の杉の子	百瀬 和孝	19
初夢	久保 守正	20
徒然運筆	風 来 坊	21
<hr/>		
小説		
黒い蟻	吉井 根	22
<hr/>		
詩三篇		
一つの世界	長谷川鉄司	7
黒いカーテン	佐藤 実	10
ためいき	荒川 睦	20
<hr/>		
薬学科学生名簿		15
表紙	村田 正弘	
目次写真	薬学科片平丁校舎 撮影中野卓雄	

第一回生の任務

医学部長 武藤完雄

学部や学科の創設された時の第一回の学生というものの任務は重大である。雑誌を作ろうという話を承って諸君が互に手を結んで立ち上った勇姿をほほえましく想像している。僕は北関東の田舎の中学を出たものだが、中学時代にも校長訓話の時に、第一回の生徒には、地の利を得ず進学を思いとどまった優秀なものが集まり、責任を感じて大いに精進したという話を聞いたことがある。

これと同じ様な話は中沢名誉教授からも度々承った。中沢先生はわが東北大学医学部の第一回卒業生の最秀才であるが、先輩がないので勉強の仕方も見当がつかず、夏休みに二高を出て東大に行っている秀才どもの郷仙を待ち構えて、東大の秀才連はどんな風に勉強しているかを窺ったりしたということである。諸君も中沢先生を囲む座談会でもやれば、得る所大であろう。

わが医学部の前身である、仙台医専時代には、薬学科があった。医科大学が創設された時薬学科が廃止になった。これは今から考えると非常に残念なことで、経済力の弱い東北だけに、わが大学に薬学科を創設することは仲々困難で、今日に及んだ。

数年前から医学部教授会でも医学研究上から云っても、薬学の協力が緊要であることが度々話題となった。薬学科が出来れば、東北大学も完全な総合大学になる。薬学科を作るには大学本部でも働いて貰わなければならないが、医学部教授会にも責任があると吾々は考えた。昨年、高橋前総長始め本部のお骨折りと、愛知さんの後援によって、薬学科の芽が生えた。継続事業として、今度は完全な三講座も通ったらしい。残りの講座も来年は出来るであろう。諸君が後期に進まれる頃には不自由のない様に整備したいと思っている。

わが薬学科は教授陣については日本一と言うことになっている。これは先輩の名誉教授の理想主義のおかげで、吾々もこれをまもって来たからである。薬学科の教授陣に就ても立派な若い方々を迎えたいと思っている。

吾々も努力するが、創設時であるから、不備のところもあろう。諸君の熱意はこれに打ち勝つことと期待している。

薬学科の組織及び学科課程について

医学部事務官 相 沢 正 作

東北大学医学部薬学科は、「薬学に関する専門の学術を教授研究し、あわせてその応用能力を展開せしめる」ことを目的として、昭和32年4月1日付で文部大臣から認可があり、増設を見たものである。

増設位置は、専門教育課程を南六軒丁の旧第二教養部及び北四番丁の医学部に、一般教養課程は富沢分校においてとなっており、校地は専用、共用あわせて89,000余坪、校舎等の建物は専用、共用あわせて9,000余坪となっているが、将来は医学部校地内に薬学科(専門教育)校舎を新規に増築する計画であり、関係官において着々準備中である。

薬学科専用に流用できる図書は、現有4,500余冊であるが、標本及び機械器具と相俟って設置当初より漸加させ、

完成年度には充実する予定になっている。

次に薬学科の講座組織及び内容であるが、これは次の7講座を昭和34年度までに充実する予定になっている。

薬品分析化学	1講座
薬化学	1 "
生物薬品化学	1 "
薬品製造学	1 "
衛生化学	1 "
薬剤学	1 "
薬品作用学	1 "

上記7講座は設置当初の構想であるが、現代薬学の画期的進展に伴い更に1講座増設を考究中である。

講座内容は本学薬学科の特色とする所謂従来の有機化学

に偏した傾向を改め、医学と薬学との密接な連繋度を強めるため、医学関係の科目を多数用意してある。後期課程における教授科目はそのプロフェッサーによっても多少の相違はあるものと考えられ、最終的にはまだ決定はしていないが、およそ次のような科目を用意することになるであろう。

- 1 薬品分析化学講座においては、
定性分析化学(2単位) 同実習(1) 定量分析化学(1) 同実習(1) 有機分析化学(1) 同実習(1) 理論化学(1) 同実習(1)
- 2 薬化学講座においては、
無機薬化学(1) 同実習(1) 有機薬化学(4) 同実習(2)
- 3 生物薬品化学講座においては、
生薬学(1単位、以下同じく1単位) 同実習、生薬化学、同実習、薬用植物学、同実習、臓器薬品化学、同実習、微生物化学、同実習
- 4 薬品製造学講座においては、
無機薬品化学(1) 同実習(1) 有機薬品化学(4) 同実習(2)
- 5 衛生化学講座においては、
衛生化学(2) 同実習(1) 生物化学(2) 同実習(1) 裁判化学(1) 同実習(1)
- 6 薬剤学講座においては、
調剤学(2) 同実習(1) 製剤学(4) 同実習(1)
- 7 薬品作用学講座においては、
薬理学(3) 同実習(1) 毒物学(1) 同実習(1) 化学療法学(2) 同実習(1) 生物学的薬品検定法(2) 講座外の科目としては、生理学(3) 同実習(1) 解剖学(2) 同実習(1) 細菌学(1) 同実習(1) 免疫学(1) 同実習(1) 公衆衛生学(1) 薬物作用論(1) 量子化学(1) 生化学(1) 化学機械学(1) 薬剤及び

経営論(1) 化粧品化学(1)

上の後期専門教育科目の中の一部即ち定性分析化学(2) 無機・有機薬化学、薬用植物学、細菌学、生理学、解剖学各1単位、計8単位は教養部に在学中の第二年度の後期から履修することとなっている。

教養部においては一般教育科目40単位、外国語科目18単位、保健体育科目4単位及び基礎専門科目24単位、計86単位以上を履修しなければならない。一般教育科目外国語等教養部において授業する科目は省略する。

薬学科に所定期間在学し、所定の課程を修了した者に対しては、薬学士の称号が附与される。

更に学年進行に伴って大学院薬学研究科の設置も考究されている。

差当って昭和33年度には薬品分析化学、薬化学、生物薬品化学、薬品製造学の4講座開設を当局と折衝中であり、必らずや実現されることを期待している。

最後に現在の各国立大学に設置されている薬学部、または薬学科を記して概をおく。

大学	薬学科	入学定員	総数
北大	薬学科	40	160
東北大	〃	40	160
千葉大	薬学部	40	160
東大	〃	35	140
富山大	〃	80	320
金沢大	〃	40	160
京大	薬学部	40	160
大阪大	薬学部	60	240
徳島大	〃	60	240
九州大	薬学部	40	160
長崎大	薬学部	40	160
熊本大	〃	80	320
	計	595	2,380

発刊を祝して

医学科 池田米繁

薬学科クラス雑誌創刊を、医学科を代表してお祝いを申し上げます。

東北大学医学部も、本年度より、薬学科が新設され、その陣容が完成へ近づいた事は、実にうれしい事です。

医者には、元来診断を下しただけでは、何ら意義がなく、治療させる事が仕事ですから、その為の、重要な一部門である薬を研究する諸君を、新しく同窓に加えて、私達は、とても心強く感じております

医学理論、技術は日々に進み、手術や心理学応用による治療なども新しい部門が開拓され、医学は闊口、興行き共

に、広く深く来て来ています。やがては、診察と治療の関係も改まり、我が國でも、医薬分業の時代が来る事が予想されますが、研究の面においても、又職業としての面においてもお互いに対抗意識などはあまり持たずに、仲よくやっついていこうではありませんか。

私達のクラスの沈滞さと比べて、諸君の活潑なクラス活動を見ていると、実にうらやましい限りです。この雑誌の発行も、その一つの表われでしょう。今後とも、旧来の伝統に、縛られる心配のない諸君が、後輩の為に、良い慣習の基を築かれる様同じ学部内の友達の一として希望し期待しています。

最後に、この雑誌が、クラス全員の為の雑誌として発展する事を祈ると同時に、授業時間の関係で、ややもすれば接触を失い勝ちな我々両学科間の連絡、融和の為の、一つの場ともなる様に希望します。

医学と薬学

本川 弘一

わが東北大学医学部に久しく待望された薬学科の誕生を見たことは喜ばしい限りである。医と薬は本来一本であるべきもので、薬を離れて医は無く、医なくして薬もあり得ない道理である。唯の化学物質さえ薬品と広く呼称される所には、如何に医薬というものが人類の本義に根ざしているものであるかを示している。一本であるべきものが、離ればなれになり、各自勝手な歩みを続けていることは如何にも不自然である。近代人はこれを専門化と称して、誇りにさえ感じていたのかも知れない。しかし本当に医学が生い立つためには、薬学と一体にならなければならないことが近頃痛感されて来た。

東北には古くは薬学専門学校があって、その卒業生が現在も当地にあって活躍されている。当然この薬専が医学部薬学科として医学部に吸収されなければならなかったのであるが、どうしたわけか医学部には薬学科が設けられず今日に及んだのである。それ相当の理由があったのに相違ないが、今にして考えると遺憾なことであった。

どの方面でも今日の研究は、以前にくらべると有機的になって来た。多くの異った分野の人達の協力によって、新しいものが生み出される。勿論小さな問題を少数の人が独自の立場から完成するということもあるが、大きな問題になるとそうは行かない。協力という点では本邦人はどう

も苦手らしい。一人一人の学者を考えると本邦の薬学界にも随分偉い人が輩出し、重要な発見も可なりあるが、ものになった研究というものは案外に少ないような気がする。中にはわが国で発見され、綿密に研究されていながらとうとう実用化されずに終り、これが外国でとり上げられ実用化され、逆輸入された著明の例もある。これなどは全く人の和を得なかったことから来ていると思う。日本人が徒らに外国崇拜で本邦人の手で作られた薬などに目もくれなかったことが一つの原因であろうと思うが、また製薬会社が長い目で薬の完成を見守るというキャパシティーを持たないことも禍している。エーリヒ、蔡の 606号は根気のよさの例としてよく挙げられるが、今日ではこうしたやり方がむしろ普通であろう。

私はまた非常によい薬が医学者と薬学者の緊密な協力と長年に亘る努力で完成された例を目のあたり見て知っている。わが学部にも待望の薬学科が生れたのであるから、早く優秀な卒業生を出して、あのような立派な協力によって研究の実を挙げる日が来ることを切望する。特に初期の卒業生の成績は長く後援に影響するものであるから、諸君の自重を望んで止まない。(医学部教授生理解学教室)

一般医薬品

資生堂チエイストア

桜井薬局

仙台市新伝馬町

電話 ②4630 番

薬と魯迅

野尻 務

何十年か前に、作家魯迅(Lu.Sin)が当大学の医学部に学んでいる。今私は徒然なるとき、彼の代表作の一つといわれる「吶喊」を読んでいるが、その序文にこんなことが書いてある。彼の幼ない頃、父親が病氣だったので、彼はいつも質屋と薬屋と我が家を循環しなければならなかった。質屋では荷物の眼差を受けながら金を受け取り、その足で薬屋へ行き、そこで容易に得られ相もない薑の根、甘蔗、つがいのコロギなどを買って帰るのである。しかし薬石効なく、父の病は日まじに重くなり亡くなってしまふ。その後彼が学問を身につけるにつれて、漢方医は多かれ少かれカタリの類に属するものだと考えるようになり、騙されている患者やその家族達に対する同情を高めたのである。そのとき偶々歴史書を散策しているうちに、明治維新の大半が西洋の医学に端を発していることを知って、このいささかつたなき知識の為にか、後に日本の田舎町(仙

台)の医学専門学校に籍をおくようになったのである。彼は卒業したら、父のように騙されている気の毒な病人を救うのだという大らかな夢をもって勉強したらしい。

しかし後に偶々授業の余暇に映したフィルムの中に、当時丁度日露戦争の頃だったので、そのニュースを映したらしいが、スパイを働いた強壯な体格の中国人が現れ、首を斬られる所を見て、体格が如何に立派であっても、精神を叩き直さねばならぬと考えて、医学を捨て、作家を志したと書いている。

私のつたなき中国語では、彼の真情を存分に伝え得たか否かは保証できない。

私に言わせれば、随分簡単に医学を諦めたものだと思うし、又漢方医がカタリだというのも、若い頃の彼の境遇が生んだ感情に過ぎないであろう。尤も彼の漢方医に対する憎しみは骨髄にまで徹していたらしく、前に述べた「吶喊」の中の一文「薬」の中にも、「人血饅頭」となっており、これは「人血饅頭」を食べれば肺病が治るという迷信のことである。又医専を退学した事にしても、一片のフィルムは単に転身の契機にすぎず、それに至るまでには苦しい悩みが有ったにちがいない。恐らくは、時には広瀬川の流れを眺め、青春の血を湧かしたせ、時には苦悶の余りあてもなく彷徨したにちがいない。

◇…雑 感…◇

解剖学教室 森 富

解剖学が専門だというと、どうも薄暗いじめじめしたところで、人の屍体や骨ばかりいじくっているような印象を人に与えがちだが、実のところ、そんなことは少しもない。私は父が解剖学者であるが、始めからそうときめていたわけではなく、大学の卒業近くになって、何ということもなく踏切ったように思われる。しかし、診療生活に入る気は当初からあまりなく、基礎医学のどこかにという程度の希望は持っていた。

子供の頃の記憶であるが、時折かかって来る往診依頼の電話を断わるのに閉口していたものであった。二、三の質問答の末、先方のいう口上はきまって、「しかしお宅は医学博士でしょう。それなら」ということだったらしい。「それはそうなんですが医者ではないんです。」そんな到底通用しそうな弁明をしながら、困り切った表情をしていた父と、同じものになろうとは当時は夢にも思わなかったが……。

近頃では、もうそれ程ではないにしても、まだ基礎医学というものはよく知られていないように思う。解剖に人の注目が集るのは、医学祭の折に、珍稀なものの展覧を期待して長い列が構内につくられる時位であろうか。現在、解剖学の専門家が研究していることといえば、とても一口には云いあらかせないほど、多方面に亘っている。しかし

しかし結果としては、彼の文学作品は、中国人を鼓舞激励し、それが新しい中国を作るのに役立つのであるから彼の若い頃の夢—彼は自序の中で述べている—は十分達せられた訳である。後に彼は東洋で最初のノーベル賞を与えられようとしたが、断ったそうである。現在、中国の毛さんも彼を中国文学の父として尊敬している。

彼の文章は私にとって、極めて難解である。口語を文学に採り入れたなどといっても、私にはピンと来ない。又評論の類には皮肉が多く盛られている。唯私が感じるのは、文章が簡潔であるという点は、毛さんの好みに合っているような気がする。

閑話休題。いま幸福であるべき大学生生活を送りながら、私は何ともいえない寂寞感に襲われることがある。自分が不勉強である為のものか、健康から来るものであるか、正直の所、私にも分らない。

ある者は、私のことを神経症だとか、さびしがりやだといひ、他の者からは「君が一」といわれるようなことをしでかすことにもなる。これが私の寂寞感の麻醉薬であることもあるのに。然し所詮、低級な薬であって、人血饅頭に劣るとも勝らないのである。それだからといって又環境のせいしようという気も毛頭ない。

何故なら、与えられている環境がそれ自体欠陥だらけで

これを強いてまとめれば、正常な生命体の構成の解明とでもいえようか。人だけを材料にすることは實際上不能であり、又、他の動物と比較して人の構造の理解を深めるといふ意味もあって、いろいろの動物も用いられる。この解剖学教室には、脳の顕微鏡標本が多数所蔵されているが、下はカモノハシなどの単孔類から人に至るまで、一寸した動物園よりも多く種類の動物の脳が含まれているのも、その例である。私の研究室で手懸けていることにも簡単に触れると、発生学の一つの主眼が置かれている。卵から、複雑な且つ統一された成体になるまでの細胞の増殖とその間の分化（形態上、及び機能上の特殊化）の過程を、いろいろな細胞成分の変化の面から追かけて、その分化の秘密を解く手がかりを求めているといえ、ほぼ誤がないであろう。人間からの材料も少しづつ集めてはしらべているが、それでは到底発生学を全過程を理めることは出来ないで、ここでも、もつぱらハツカネズミをひねくりまわしている。

そういったことが、実際にどう役立つのかという疑問も起ると思われるが、はかばかしい答も用意出来ない。又、今すぐ何の役に立つかはあまり考えなくても、必ず、いろいろな問題の解決に資する基礎となると思う。ただ、常々困り、又希望することは、こういった地味な仕事をつづけようという人が次第に少なくなってしまったことと、それから、単なる実験補助者だけではなく、特別に養成された優秀な技術員のせめて一人か二人の定員をもうけてほしいということである。そして又、目盛を3ミクロンのところに合わせなければ5ミクロンの厚みの標本をつくることが出来ないミクロトームを動かしながら思うことは、やはり、もっともっとお金がほしいということである。

あることが事実であっても、私はそれを充分に研究し、分析し解決の糸口を掴もうとさえしていないからである。

ここまで考えてくれば、おのずから自分の不勉強さを痛切に感じない訳にはいかない。少くとも今の私は、寂寞感の由来する矛盾と四つにとつ糾んで、そこに始めて新しい境地が拓けるのではないかと考え始めている。これが私のしなければならぬ勉強の第一課である。

魯迅も、彼の自序の中にかつて毒蛇の如き寂寞感に悩まされたと言っている。彼の如き救国の大理想を以て、生きようとした人間が、この人間社会に於て寂寞感に襲われなかったとしたら、それはむしろ不思議ともいふべきであろう。然し彼は自分を国民の中に沈め、又古代に返るといふ事によって、自分の魂を麻醉させたのである。そしてこのときはじめて彼は悲憤慷慨することを止めたと言っている。この簡単な、しかも洒落のある言葉の中から、彼が自分の国を徹底的に研究するという事にして、苦しい勉強を続けたであろう事をひしひしと感じない訳にはいかない。

少くともこの一年の間、私は自分自身を考え、新しい境地を拓かなければならない。これが私が私にのませる為に作らねばならない最初の業である。そのとき精神宇宙の神は三百六十五日の間に、私にそれ以上の成長のしるしを与えて呉れるであろう。

研究室入門

岩口孝雄

薬学の部屋に入る途端、異様な匂がする。始めての人なら誰でも感じる蒸くささでもいうのでしょうか。長くいれば馴れっこになっていると見えて何閃せずといわんばかり。中には白衣を着た人々が熱心に反応に眼を見張っている。実験台、周りの薬品、器具もすべて古めかしく天井には反応中爆発、引火したと思われるような黒ずんだ跡も見受けられる。こんなお粗末な所で多くのすぐれた研究がされるのかと驚歎するばかりである。研究生活には幼稚園の新入生は誰もきれいな白衣を付け張切っではいるものの研究室の空気には馴れずどこそこぎこちない。自分のプラッツを整理し仕事に取かかる前にまず溶媒の精製を行わねばならない。無水のアルコールを作ること本には至極簡単に書いてあるが、いざやって見ると蒸溜という一操作でさえ面倒くさい。それに化学実験には火がつきもので、不注意にやると引火し、火傷して部屋の人々に迷惑をかける。そうかといってやらないわけにはいかず、時々危そうにやっているのが見付かると「君、危いよ！それでも化学をやったのかい」と遠慮なくびしびし注意される。何んてうるさい人だなあと思っても教えてくれるのだと思うと又有難くなる。

研究室に入ってから有機化合物を取扱う手始めとして行うのが有機分析である。文字通りどんな化合物が含まれているかを明らかにするだけなのだが、何かわからない数種の混合物量にして50cc位の検体がわたされる。まずオーソドックスな方法で始めるのであるが、要領を得ない。熱心さのあまりに失敗も多い。手をぬけば自然は正直な結果をもたらす。結晶すべきものがしない。二、三化合物がわかった頃にはもう検体がなくなってしまった。仕方ないからこっそり貰って来て又振出しにもどって始める。何回か繰返して苦労しやっとなら全部明らかになり、ほっと一息という所、これからのよいよ本格的なテーマに取組んで実験するのである。どんなテーマかなと思いつつ、大命降下を待つのである。教授から呼出があって簡単に「君はポーラログラフの支持塩の研究をやれ」といわれるだけ。薬とは全く関係もないし、ポーラログラフィーでどんな学問かも知らない未知の世界である。しかし幸なことに研究室には、誰かその方面の専門家はいるもので、指導を受けたり文献を読んだりして知識もだんだん豊富になってくる。文献調査も又一仕事である。要領よくやらないと大部時間を費し見落すことも多い。だから新しい仕事をしようとする

には準備も充分必要であり、改めて先人の偉大な業績に頭がさがる思いがする。調べた知識をもとにして実験を始めるのだが、既知のことでさへもうまくいかない事が多い。まして新しい事にぶつかるとむずかしい。「どうしてうまくいかないし、原因もわからない？」考え込んでしまう。仕事が進まない時は他人に取り残されはしないかとあせる気持、かえって失敗を繰返えすような結果となる。何をやっても見ても面白くない。だがふと思い出したことが仕事を一歩進める手掛りとなり、実際成功した時の喜びは例えようもない。今までの苦心もどこかへふっとんでしまい、本当に生甲斐を感じ研究に対する自信が出来る。テーマの仕事が始まると仕事の経過を見に先生が部屋に回って来る。教室員は俗にこれを空襲といい怖いものの一つになっているようである。仕事が進んでいない時は何と答えてよいか全く困ってしまう。逆にうまくいっている時は報告するのが楽しみだ。与えられた仕事を完成するには能力は勿論の事であるが、実験化学では特に細かい観察力と強い忍耐力が必要である。最近のように学問が進歩し分化すると大きな仕事をするにはお互いの協力研究が必要である。教室は教授を中心として教室の大きな仕事に各人が協力していかなければならない。研究生活を通じて教室の年中行事の一つとして、旅行は楽しい思い出となっている。又若い者ばかり集って時々コンパをやり、氣勢をあげたことも懐しい。このような温かい家庭的な環境の中で、研究のかたわら、新入生をはぐくみ立派に成長させて優秀な人材を社会に送り出すのが大学の研究室である。東北に生れた薬学まだ一才の赤子の如く弱いもので、これを立派に育てて行くことは、我々の双肩にかかっているのである。東北の寒さにも負けずすくすくと成長させなければならない。今後次の道も多いと思うが、将来の夢を楽しみに我々すべてが意気と若さをもち手をたずさえて東北にふさわしい成年にまで薬学を育てようではありませんか。(薬学科助手)

医薬品・麻薬・衛生材料
有名メーカー特約店 御

株式会社 鈴彦商店薬品部

仙台市北二番丁 9 1
電話 ②3770・②4769
②6274・③0934

仙台市小売部 仙台市名掛丁45
電話 ②9666

宮城県登米町
電話 14,110,111

市河三喜博士 と 児島喜久雄先生

三 岡 弘 道

昨年の春ころに、東大の名誉教授の英語学の市河博士の多分四冊目の随筆集「旅・人・言葉」が出た。早速これを求めて、随筆の涙にかきくれたことは言うまでもないことだ。その中の一篇の「名言佳句の暗喩」の書き出しの所を引用する。

六年前大学を停年でやめた時間俵の児島喜久雄君が記念に肖像画を画いてあげようかというから喜んでお願いした。その時顔を見ながら、例の調子で「つまらない本ばかり読んでいるから額にろくでもない皺が出来たな」というようなことを言ったが、実際私の蔵書の大部分はつまらない本ばかりで、かって書齋の本の整理を女子大学の卒業生に頼んだ時、「先生の処には一冊も読みたい本が無いのが不思議だ」と述べた通り、文学の作品も少しはあるが、何といっても語学の本が圧倒的に大部分を占め、しかもドイツ語の本が多いから大抵の人はよりつけそうもないのである。……

私は此所を読んで、今は亡き児島先生の「例の調子」が文字通り、リアルに思い出されて、児島先生をなつかしく憶はずにはおられなかった。市河博士の肖像画を拝見するの榮は得ないが、私はまず二人の類稀な優れた学者の対座された好画図を勝手に画いてみようとした。

児島先生は東北大学で西洋美術史を担当されていたが、昭和11・2年ごろ東京大学に転ぜられたのだが、その直後東北大学に出張教授をなさった。その時、先生にお会いすると、「今、仙台ホテルに泊っているが、南氷洋の捕鯨関係者と泊り合せて、いろいろ面白い捕鯨の話聞いたので、そんな話でもするから、ホテルにやって来たまえ」ということだったから、私は喜んで先生をホテルにお訪ねした。私が参上した時には、内藤さん（東北大学の日本史の出身。古代瓦の研究家。前子爵）御夫妻、その外に一、二人の先客があった。先生から醸し出される独特の春風騷蕩たるアトモスフィアに、私は暫くぶりに接すると、もう何

とも言えない無上の喜びを身内に覚えた。私の行った前からのお話が一段落してから、先生は、やおら私に向かって話しかけられた。「今、東大の文学部長は市河君だがね、この間、市河君がね、君、この前の教授会議に出なかった届を出してくれ給え、と言ったので、僕はね、へえ、そんな届を出す必要があるのかね、と言うとね、市河君は規則があるのだから出してくれ給えと言うものだからね、僕はそんな規則があるのなら、その規則をやめるように改正したらどうかね、僕はこの前の会議に出なかったことを、ちっとも否定しているわけではなく、この本人自身がちゃんと欠席を認めているという、このくらい確かな証拠があるのに、下らない届なんか出す必要は少しも認められないね、改正し給えと押し返すとね、市河君が、僕が部長になって

から、世界中の有数の大学から教授会の規則に関する資料を、できるだけ集めて、その長をとり短をすてて完全なものを作ったのだから、もう改正の余地は全然ないのだ、と言ったよ」と、大体こんな具合に、終始にこやかな温顔で世にもうれしい話のように、ゆっくりゆっくりお話しになった。私はこの話を聞いて、益々うれしくなったことが、まるで昨日のことのようになり、今でも時々思い出される。それで結局、先生がその届を出したのか、それともうやむやになってしまって、市河博士遺製ともいうべき細緻な金科玉条に児島先生のインノセントな瑕斑がつけられたのであろうか、つい聞きもらしてしまった。私は、むしろ後者の方を、美人のビューティ・スポットのように賞味したいのである。

(教養部助教授 指導教官)

一つの世界

長谷川鉄司

まぶたを閉じると 私の世界になる
そっと芽をふいた花が どんどん殖えて
喜びと希望の園に咲きそろう
ふっと浮いた黒い雲が どんどん広がって
にくしみといかりの世界にむらがる
それでも私は嬉しい
誰にも邪魔されない世界は
ただここだけである

ンノセントな瑕斑がつけられたのであろうか、つい聞きもらしてしまった。私は、むしろ後者の方を、美人のビューティ・スポットのように賞味したいのである。

有限
会社

仙 寿 堂 薬 局

仙台市木町通十三番地

電 話 { (2) 3 8 5 5
(2) 3 6 6 2
(3) 3 6 6 2

み ち

一 色 幸

まだ私が学生の頃だったから二十年も昔になります。たしか新聞に日本人と、国籍がどこか分かりませんが、さる外人との違いを比較した一文がありました。内容の大部分は記憶にないので本論であったか序論であったか、それとも別の議論の一節であったか分かりません。もしかすると別の話と混同しているかも知れません。何でも日本人は洗面所が水漏れで水浸しになっていても煉瓦を飛び石にならべるくらいのもので、一向に積極的対策を考えない。所がその外人なら即座に修繕を始めるだろうという意味でした。本当にその人が修理を始めたかどうか私には分かりませんが、少くとも嘗ての日本にはそんな場所がいたる所にあったように覚えています。

歳月も20年も流れれば子供も大人になるんだから、今、日本も昔の面影がなくなっていくらに metamorphose しても無理ありません。

面影がなくなるくらい？ そんなことを書いてみたものの私の本心は実は必ずしもそれ程に思ってはおりません。

井戸の中においては何れ位変わったのか本当には分からないのです。こんな場合いっそ、あの人に来てもらって率直にみたままを教えてもらったなら面白いでしょうね。その人は一歩外出して、昔ながらの砂利道にさしかかった途端即座に感じたままを答えてくれそうです。

砂利道はちょっと足がぐらつき、自動車が小石を飛ばすけれども費用が安く簡単に出来上るので、私たち誰にでも気をつく舗装法です。でもその人は何故ローラーをかけないかと云うにきまっています。履き物やタイヤの消耗、ガラスの破損やエネルギーの損失などを計算するとローラー代など何でもないと云うに違いありません。だから私達も負けずに答えます。「予算さえあればまさか砂利でお茶をにごすような事はしません。勿論ローラーもかけます。更に予算が許せば自動車が通れる位の巾にアスファルトを敷きます」これ聞いた彼氏あまのじゃくというわけではないけれど、逆襲してくるかも知れません。おそらくこんなことを云って……「アスファルトも場合によっては道の両側にだけ敷いた方がよい。そうすれば中央部は砂利にローラーをかけたただだから自動車も規定以上のスピードを出すわけに行くまいし、通行人だって、よく舗装したアスファルト歩道が両側にあるんだから、何も規則を犯して危険な車道を濫歩するに及ぶまい」って。

どうやら語は別のものにふれてきたようです。だからこれ以上書きつづけてももうどうにもなりません。私は皆さんに自由にこの後を書き綴ってもらおうと思っているんです。
(薬学科教授)

年 頭 所 感

▷……………◁

水 野 左 敏

▷……………◁

高等学校三年生を去年の三月に無事卒業して五月に東北大学の薬学科に入学してから、はや八月になり、昭和33年をここに迎えたわけです。高校生活三年間なんかすぐに経ってしまったように感じられたのにもまして、この大学生活八月は本当にまたたく間に終わってしまったようです。さて、ふり返ってこのすぎさった昭和32年を考えてみますと、僕にとって初めて生れた土地を離れてよその土地に暮らすこととなり、少しばかり大人になり、物を観る目が肥えた（僕にはそんな風に思われるのですが…）以外は平々凡々とくらしただけの八月ではありますが、日本という国について考えてみるならば、又世界のすべての人について考えてみますと、一つのエポックを作った年ではなかったかと思えます。日本が国連に加盟を許され、安全保障理事会の非常任理事国に選ばれたことや、東海村に原子炉の

火がともったということなど僕達日本人にとっては忘れることのできないことがらではなかったかと思えます。そしてついには10月4日には人工衛星の第一号が打ち上げられたではありませんか。この事件は本当に宇宙時代の到来に近いぞ、という感を与えてくれました。僕はこの昭和32年10月4日という日を大きな意義のある日だと思うのです。この日以前と以後とに於ては世界の色々な面において、特に政治的、科学的な面でその考え方が、がらりと変わったのではないかと思います。もっとも近代社会における新聞、ラジオ、その他のマスコミにより色々誇大されたり、正しく理解されなかつたりすることはありますが、それをぬきにしてもなにか科学というものに目がむけられるようになってきたのではないかと思います。これらの意味で、この昭和33年という年は、色々とおもしろい年になるのではないかと思います。僕達も大学二年にもなるし、大学生活の中堅にあたる年でもあり、学問をやってゆく上にもなにかはり合いといったようなものが感じられるのではないかと思います。昭和33年の年頭にあたりこの一年間こんな風に考えました。

—昭和33年1月2日—

無題

柳瀬良文

自分はこの間成人の日を迎えたばかりだが、此頃はどうも時間のたつのが早くてならない。過ぎ去った時を振り返って見るとあらためて年月のたつ早さというものに驚かされる。

つい此の間迄は高校生でにきび面をひっさげて先輩共の語るY談などにあごをなでたり、おっかなびっくりにウィスキーをなめたり、三年生ともなれば、いつの間にやらタバコを吸って月に一度位づつ禁煙を誓ったりしていた。

やがて順当に浪人となって、あたりの人はどう思ったか知らないが、自分丈は悠々として人生の後の方になってこの浪人の経験は生かされる筈だと確信していた。縁あって一朝大学に入るや、学校の講義はその大半を「自ら学ぶ時間」となし、宿題といえは提出前1、2時間を与えられればその九割迄は仕上げて見せるが如き素晴らしい技術を会得し、試験前ともなれば参考書や他人のノートを何がどう比例したのやら、反比例したのやら何も分らず、とも角目を通し、大学生生活第一回目の前期試験を恙なく終えて、例によって学校に入ったり出たりしていると昭和32年もくれて33年の正月を迎えた。

そして又、学校の授業も始まり、居座り気分も抜けてはっとなつて(はつとなる必要もないのだが)見れば、自分は既に人生六十年と仮定すればその三分の一を過ごし、薬学科という所で化学の宿題や物理のノートを盛んに複写している。まさに光陰はジェット機の如しというべきか。

自分は元来、大学は文科系を志望して法科を受験したのだけれども、そこはそれうまくいかななくてほんんな事からとんでもない方向につ走ってしまつて、時たま行先心細くなつたりもする。けれども、世間をずっと見渡して見ると自分の見聞きできる範囲のところでも、大学に入るためと勉強をしている中にその余りの勉強の激しさが頭にきてしまつたり、肺にきてしまつたり、能力のある人が経済上親の腰をこれ以上囓れば折れるやも知れず、仕方なく学校を過ぎかたり、又は昼間は致々として労働に従事しその得た金で口を糊し、且つ本を買い求め、仕事が終われば腹のへるのものともせず真直ぐに夜学に駆け込み真剣に自己の生活と対決している様な多くの同輩の居ることを思うとき、朝は皆の起きた後のっそりと起き上つて、時計は成丈見ないで急がずに飯を食い、やがては学校に出て、授業に出る以上は真面目に取り組むのかというところでもなく、適当にお茶を濁して、機会をとらえては酒を飲み、安くもないタバコを吸い散らし、それでもまだ何か不満足気な生活をしている自分を省り見ると、心から、「俺はめく

まれている。これで自分の進もうとしていた道が少し位曲つたからといって何もしないで心細く思つたり、それを種にして怠惰な生活をする様では真実情無いことだ」と思うのである。

しかしながら、自分の将来を察するのは兎も角も、凡夫の浅ましきというべきか、親の腰を囓る身でありながら、午前2、3時迄も飲み歩いたり、焼鳥屋のオツサンを相手に怪気炎をあげたり、学校に出れば授業をさぼり、小銭が有ると映画の観賞ばかりやつて、教科書・参考書の類はまさに「積ん読」で、この頃はいかにも日がたつのが早いなどとぼやいている。もし親などが心配して注意したりすれば何となくそれに逆いなくなつて、言わなくてもよい事を口から出放題に屁理窟を並べ立てる。そんなことを後になって胸に手を当ててよく考えて見ると、思はず誰にもなく恥しくなる様なことばかりである。

そして一方ではその様に殊勝な気になるかと思つと、成程自分は毎日の生活を怠惰に惰性的に過しているとしても、論語にもある様に無論自分もそう思うのだが、親に孝であることはまず身体髪膚をいためないことである。そこで俺の事を言えば成程酒やタバコをのんで、無駄な金を使つたり、又遊び回つてばかりいて勉強は時たまお茶を濁す程度にしか(無論お茶を濁す程度にもなさない方もいるようなのでずっとよいわけである)しないといつても、親に心配をかける様な病氣もしないし、大学に入ったからといって、あなたとならばどこ迄も等と短気を起すこともしない。第一相手がないのだからできる筈がないのだが…。さすれば俺は親孝行である点に於て一部認められるべきであるなどと思つて悦に入っていると、良心が顔を出していやそんな言ひのがれはやめろ、そんな事を自分で決めて安心して自分の悪い点をおおつて仕舞おうというのか、そんな有様でたらだらと生活し、唯一度の人生を無為に過してしまつては男子としてこの世に生を受けた甲斐もないではないかという。そこで自分はドキリとして、再び反省しよし明日からはもっともっと生活を充実させよう。もっと真剣に生活と取り組もうと思ひながら充実した生活をおくるべき明日を手くすぬ引いて待つのである。

追記

店の李太白は酒を飲むと詩が自ずと口に出たそうであるが、小生はウィスキーをなめて以上の如き駄文を得た。勿論、もっとちゃんとしたものを書きたいのであるけれど、何しろ文を書く等ということには一向不案内でそれに文才の甚しき欠如はただ才ある人を羨む丈である。更には雑誌の原稿を集めるのに苦勞なさいている方々の為にも自分ばかり手間どつても工合が悪いと思つたものだから(何も今度ばかりとは限りませんが)思ひつまま書き付けた次第です。

最後に我々の雑誌を作る為に一生涯懸命力なされた方々に心からお礼を言はさせてもらつてこの拙文を終りとしませう。

—妄言多謝—

黒いカーテン

佐藤 実

温いおこたに入りながら
ふと黒いカーテンを見た。
黒いカーテン、それは小学生時代のある日を
思い出させる。
美しい、純真な、しかし苦しい思い出を……
黒の舞台上で白衣の天使が踊っている、
美しく、しとやかに、我を招く様に。
美、これこそ本当の美だ。

私はじっと見とれていた。
やがて踊りは終り、
一瞬間互に立ち止って向い会った。
しかし私は口もとを動かすだけで
言葉には出なかった。
黒いカーテンに彼女の姿が淡く映っている。
……………
友の声がして、ふと我に帰った。

フォークダンスをして

長 浜 昇

一般にダンスというと、女性的でエロチックなものと考えがちであるが、風俗の違いで我々の生活から離れた存在にあるからで、又男女がベアになってする事からそう考えるようになるのだろう。F・D（フォークダンス）は文字通り民族舞踊であって、せいぜい盆踊り位に考えて欲しい。F・Dはスポーツでもあり、又踊りは人間の本能でもあるのである。「F・DよりS・D（ソーシャルダンス）の方がいい。」などと云ってるが、実際に踊ってもいなければ、S・Dをするつもりもなく、ただ口先だけの人が多いものだ。成程、S・Dは自分の意志のままに踊れるし、将来も有効である点に於いては、興味もあるし良いかもしれない。だが学生時代に多大の教授料を払って習う程のものでないだろうし、社会人になってからでも覚えられる。その点F・Dは、学生向きで金も掛らないし、且S・Dとは違った面白さがある。

仙台は、日本でも特にF・Dが盛んなところであるようだ。先日でもアメリカのリッキー・ホールデン氏が、わざわざ来仙して、指導して行ったほどである。現在仙台では、市教委、東北大同好会、YMCA、その他寮、学校、小団体によって行なわれているが、中でも市と同好会が大きな会であると思う。又体育のBコースでも取ることが出来る。同好会は毎週土曜の午後中央体育館で、男子は東北大生、女子は一般に誰でもよいが、宮城・三島の学生が多い。一方市の会は、金曜夕方から荒町小か上杉山小で行う。こ

の会は誰でも参加できるので、ハゲ頭のおじいさんから家庭の奥さんまでやっていて、なかなか庶民的で一般にやさしい種類のものが多い。内容はカップル、サークル、スクエア、コントラその他いろいろだが、基本的ないくつかの動作の組合せであるから、すぐ覚えられる。講習会に一度出れば大体は踊れるだろう。

所で一般にダンスの興味をPで表わすと、次のような式が成り立つとか？……

$$P = k/r^2 M$$
（rは距離、Mは質量、kは比例定数）
いうなれば、ダンスの興味は距離の二乗と質量に反比例する。即ち、パートナーとの距離が少ないほど、又その質量がデッカクないほど興味が増すということである。

フォークダンスで知り合って、ついには結婚にゴールインし、その結婚式にパーティーを開いたなど、ほほえましい事実もある。又同好会主催の遠足などもある。

ダンスをやっていると気持が晴れやかになるし、生活にも快活さが出てくる。これはダンスのみに限らず、あらゆるスポーツについて云われることだが、四年間勉強のみに過しては、人間偏屈になってしまう。何か趣味を一つ作り給え。

医薬農薬試薬

小泉薬品株式会社

仙台市長町字北町54番地
電話(3)2434・(3)2395

支店 大町小泉薬局
大町五丁目13 電話(2)2171

「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにゃそんそん」旧盆の三日間、徳島は全く阿波踊りの渦に巻き込まれる。阿波踊りは、最近では会社の宣伝や、観光宣伝の為大部プロ化され又、ショウ化されてきたが、以前は全く阿波人のための素朴な、レクレーションをかねたものであった。即ち一町内から一つの踊り子の連を作って、老人も子供も男も女も全てが街から街へと踊って行ったものである。そもそも阿波踊りの起源は、豊臣秀吉の事で有名な蜂須賀小六の孫の蜂須賀至鎮が、徳島の地に城を築いた時、その落成を祝って集った町民達が、祝い酒に酔い浮れて城下へと踊り出し、その後もその日には無礼講が許されそれがいつの間にか盆踊りと結びついたものらしい。従ってこの阿波踊りは、普通の盆踊りとは違っていて普通の盆踊りは手の動きに重点が置かれているのに対し、阿波踊りは足の動きというよりも身体全体の動きに重点が置かれているのである。それに、三味線・笛・鉦・太鼓から小鼓まで入ったにぎやかな雑や「ヨシコの節」という雑歌や、最初に述べた音楽や「ヒョウタンばかりが浮くものか、私の心も浮いてきた、アーリアエライヤッチャ エライヤッチャ ヨイ ヨイ ヨイ ヨイ」という様な合の手が入り、それにつれて若者男女が何の規則もなしに、手振り足振り踊るのである。このように踊り方に全然規則がなく誰れでも踊れるような踊りなんて、他に類を見ないんじゃないかと思

(ふるさと)

南國伊豆とか常夏の伊豆とかいわれて、とくに角伊豆の冬の暖いことは一般に知られている。初冬の頃はいで湯豊かな伊豆の園は亦味覚の伊豆とも言える位食物は豊富にある。先ずみかんの美味に堪能しようと思えば、海に囲まれている伊豆のことゆえ到る所で喰べられるが、とりわけ熱海の先の多賀・宇佐美などのみかん山を眺めながら伊東に入れば、ここは昔からのみかんどころとして有名で、郊外には黄金の山がどこにも見られる。ここから東海岸をたどると民謡にも謡われている本場の熱川や片瀬の温泉地から昨今は温泉も出ている漁港で知られた箱取あたりへかけての本場が控えている。箱取から三十分もバスに乗れば、又温泉とみかんの河津温泉郷で、谷津、峰の温泉町では湯煙りと共にチョキチョキと鉄の音がきこえて、みかんの木陰から籠を背にしたねえさんかぶりの乙女達の姿も見受けられる。河津温泉郷から下田までは舗装されたドライブ・ウェイで、下田から更に三十分のバス旅でのんびりした伊豆の中でも実に暖かく、冬のさ中でも霜さえないか見られない下賀茂の温泉がある。コースを伊豆の西海岸にとれば、土肥温泉なども町の周辺のみかん山が多く、ここに特筆すべきはこの辺りはネーブルのうまい所であって、土肥のネーブルといえれば世に知られている名産である。ここで

う。又、最近では少なくなったが、スゲ笠や緑の透きとおる花笠をかぶった良家の娘さんや花街の女達が、踊りを伴わない「流し」と呼ばれて、三味線を引きながら街を流して歩くのもある。この時には、女の方は全く美しく見える。そもそも阿波の女は「讃岐(香川県)男に阿波女」といわれる如く、美人の多いので有名である。この阿波が美人の産地である起源については諸説あるが、南北朝末期から室町時代の終りまで活躍した細川一族及びその家臣の三好氏が阿波を支配し、それらが京都と徳島に二つの屋形を持っていて、その時京都から多くの京美人が流れ込んで来たという説が有力である。(でもこれもあまり信用できない) その美人達が阿波踊りの時には「夜目、目目、傘の内」の中のカサをかぶっているのだから、より美しく見えるのは当然の話である。かくて旧盆の三日間は、見ても心が浮き浮きするほど街中が浮かれるのである。

阿波踊り以外の阿波の名物としては、鳴門の渦や阿波藍、淨室離用の木偶等がある。鳴門の渦に関してちょっと説明しておく、瀬戸内海から太平洋への出口に、ちょうど淡路島があつて急に狭まれている為に、潮の満引の時落差が激しくなり、渦を巻き起すのである。大きいものになると、30メートルもの渦が出来、小舟なんか時としては吸い込まれる事がある。

福島英明

ちょっと天城にふれよう。三島・長岡・修善寺とバスで過ぎ湯ヶ島で降りて歩くころは、川端康成の伊豆の踊子が思い出されて、ハイカーの旅情をさそうに十分なあたりの眺めである。淨蓮の龍附近ではわさびの栽培がよく目につき伊豆の情緒が味える。これより天城峠にさしかかる。八丁ヶ池はキャンプに絶好である。いろいろな鳥の啼き声をききながら、木立の中の道を登ると天城連山の尾根に出て視界が突然開ける。行手にはもう大きな木はなくなり一面のお花畑である。「はるか海の見渡せる天城連山の尾根のお花畑の中」「箱根路を我越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ」ふとこの歌を思い出して気分將に爽快といったところである。前方は緑にかすんだ山が並び、仰げば唯一面青色である。帰りには万三郎岳万二郎岳を過ぎて東海岸の熱川に出るのがよい。数々のロマンを天城は生んだが昨年暮の事件はまたしばらくの間、訪れる人々の話題に上ることであろう。沼津から富嶽の雄姿を海の彼方に見る静浦や三浦の浜辺を巡って近くの本良などもおいしいみかんの産地である。伊豆の溫和な海風をうけて育つみかんが一般に多いことはその地勢からいっても当然のことである。

伊豆は見るより味う所であり、知れば忘れることの出来ない仙境である。

中村善次郎

印 象 ・ 断 片 — EXTRACTED

◇ 竹 の 子 ◇ 柳 瀬 良 文

俺達は謂はば各々可能性をもった竹の子だ。その可能性をいかにのばしていくかは、各々の責任である。長いのか短いのか、太いのか細いのか、いろんなのがあるが、どれも皆可能性ある竹の子だ。しっかりと根をはって養分をとり、太陽のめぐみを受けて人の役に立つような実をならそうではないか。

◇ 愚 論 ◇ 高 石 勝 夫

元来俳句は「いろは」から任意の十七個を取り出して並べた順列の一つにすぎないそうです。芭蕉、子規等は偉大な数学者でした。そして東北大の教授もまた偉大な数学者です。というのは十七個の中から任意の一個を取り出せたからです。

◇ 結 論 ◇ 中 居 健 介

一期二期と立て続けに二人の恋人に肘鉄を食い、顔色を失して歎息して居た時、ワラをも掴みたい気持で受験した。ワラを掴んで助かった話は聞いた事がないから、掴んだのは是が非でも浮袋でなければならぬ。

◇ す べ り こ み ◇ 村 田 正 弘

間にあわぬと思っていたんぞ。ところが汽車は止っていたんだ。あわてて飛び乗ったんだ。行先がちよっと不安だ。一時間後に出る急行の方が早いんじゃないか。ベルは鳴っている。乗り換えるんなら今だ。だがもう動いてるんだ。

◇ 宝 田 克 男

病気になるれば、金持も乞食も葉が必要だ。諸君、安い葉を作ってくれ。誰にでも買える葉を。

(バカヤロ、自分でやれ。)

◇ 野 尻 務

満洲ハルビン市の生れ。軍国主義、共産主義、そして民主主義の教育を受け、その欠陥を静観して来た。この三つを調合すればどんなものができるだろうか。

◇ 夢 ◇ 水 柿 道 直

薬学科で勉強している我等四十人の内、誰か世界に名をあげる者もあるかもしれない。と一寸考えてみた。ガンヤハゲの新薬を創製してノーベル賞でも受ける者が居ないと断言できない。大きな夢と希望を抱いて、大いに頑張ろうではないか。

◇ 武 田 元

先日友人の家に遊びに行った折、話が旅行のことになり

同座してた彼の姉に案内図をもらった。暫らくして鼻をかもうとした時ハンカチを忘れてのに気付く「背に腹は」と思って先の地図で済ました処、話が戻って「さっきの図一寸見せて」といわれた時は大変困った。紳士たるべき者ほんの油断もするものではないと思った。

◇ 福 島 英 明

俺はなんで生きているのだろうか。百万分の一の確率もない英雄になる事を望んでか。ない才能を過信して偉大な科学者になれると信じてか。空中楼阁の様な幸福を追い続ける為か。それとも、生れてきた惰性で生き続けているのか。ええいそんな事酒でも飲んで忘れてしまえ。

◇ 六 十 字 ◇ 増 田 貢

六十字、何を書こうか。六十字は短いようだ。皆はどんなことを書いたのかな。後二十八字あるな。よし。寿司は寿司の味だけ。//未完成//は音の流れか。花の香は嗅覚を魅するだけ。//モナリザ//は絵具の塗り重ね。呪え、憎め、蹴飛ばせ、倒せ、情熱のない青春を、あっと、六十字は優に過ぎたな。六十字は短いな。

◇ 自 分 に 欠 け る も の ◇ 林 春 江

桂正作の如き一その境遇に処しその信ずるところを行うをそれで満足し、安心し、そして勉勵する一といった現実徹する精神である。

◇ 1 1 0 番 ◇ 近 由 喜 子

//三つ四つ二つなど、ならば居たるさへあはれなり//ある日の××の授業風景。新設薬学科の第一年目もかくの如く平穩無事であっては、110番の出るマクはさらにない。

◇ 軌 道 ◇ 久 保 守 正

夜、空を見た。星が沢山あった。その中の一つが気に入った。その星の人となりたかった。綿密に軌道を計算してその星に向った。しかし途中で軌道をそれた事を知った。そこでは万有引力の法則が少しの誤差を生じる事を考えに入れなかった為だ。しかしここまで来た以上、あの何かとうるさい地球に戻るのもバカらしい。そこで決心した。慣性の法則にまかせて、宇宙の果まで行こうと。

◇ 富 沢 分校 ◇ 京 田 守 弘

明るい草地の芝とクローバーの芳香の中に寝転んで海を眺める。と話す時、誰でも日本一素晴らしい環境の大学を想像してくれる。

◇ 宿 題 ◇ 日 塔 脩

朝の起床などまで、制約は、ぼんやりした。しかもやり

きれない圧迫感を大きくする。そんな時、いっさいを忘れた、感傷の微塵もない放浪にあこがれる。だがそれがすでに現実逃避の感傷かも知れない。

◇できないとしない◇ 草野源次郎

厄介恋愛せじと決めていたが、できないのが、本音だった。外的条件はともかく、噂の恐怖、小心、意地張りな自我等、無意識裡に働く反作用によってできないのである。何によらずできないからしないの境地に達することだ。

◇ I ◇ 小野寺 威

人間は誰でも宿命的なものである。如何に努力を払っても、その宿命の殻から抜けだすことは出来ない。問題はただその宿命の中で如何に有利に自分を動かすかである。

II

二人の人間は決して完全に一致することはない。従って自分以外の人間を独占できない。否、自分さえも独占できない。無意識はこう叫んでいる。

◇折にふれて◇ 中村善次郎

何を与えるかは人間の問題ではない。現在の自分に課せられたものを忠実に行って自分の置かれた道でそれを発見し、実現しよう。畢竟与えられた物を人生の終局に運び行く可き試練と苦勞と実現の一生において総ての個人が皆同一の運命を担っているのではなからうか。

◇ ◇ 渡辺 精子

誰にだって嫌なことがあるはず、どうしても出来ないことがあるはずだと思います。それが私にとっては文を綴ることなのです。空っぽな頭の持主の哀れさでしょう。

◇不思議に思うこと◇ 長浜 昇

我々は物事を主観的に実行するが、想像の上では、自己を客観的に見る。例えば、君が食事をしている場面を想像して見給え。そこには、君自身が登場して飯を食べている場面ができるだろう。即ち客観的に自分を見ているわけである。丁度映画の一場面のように。我々は主観的な想像の場面を作ることには出来ないものか？

◇出来ないことをすること◇ 荒川 睦

程度の差こそあるが、誰でも出来ないことを多くもっていると思う。だが出来るように努力する人とならない人との間に人間の差異が生ずるのだ。我々はあらゆる点で可能性を多く持った人間であるのだ。一つの世界に満足せずより多くの世界をのぞこうではないか。

◇積極的に◇ 竹内 芳成

「犬も歩けば棒に当たる」と云うが積極と消極の差はそのまま西洋と東洋の差であると思う。それは個人についても同様で消極的な人で大をなした人は少いようだ。

◇ ◇ 柴田 徹一

「自己を知れ」などという金言はまったく愚な句だ。自

分の能力限界を知ればどこまで可能性があるか等という楽しみや努力する意志が削られてしまう。そんな人間は廢物品にすぎないもぬけのからだ。自分の死ぬ時間がわかっていたらまったくその人間はみじめだ。自分が何時死ぬかわからぬところに毎日の生活の楽しみがあるのだ。

◇ ◇ 水野左 敏

静かな太平洋の真ただ中に一人泳いでいた。太陽は真赤に輝いて水平線の向うに沈もうとしており太平洋の海を紅く染めていた。何か死にたい気になった。ここでなら死んでもよいと思った。

◇ I ◇ 引地 学

聰明で、分別あり、気が利いて、健康で、強く丈夫で、哲学、文学、芸術、科学何んでも通じ、敏速で、上品で、ハンサムで、社交的でその上忍耐強く、正直で、勤勉で、情にもろい。穢を知らない人になりたい。我々日本人は。

II

人間はどの道を選んでも後悔は常に伴うものだ。

◇ Money ◇ 後藤 正義

我々の生活行動を束縛するのは金のように思う。金ゆえに学校と下宿の往復をテクリ、大酒を食うなどは桃源の桃を食いたいと思うに等しい。地位、身分、名譽と金との関係は密接な関係があるようだ。金が地位、身分、名譽を生み出すのか地位身分名譽が金を作るのか、どちらであるか知らないが、あるいは地位、身分、名譽にあこがれる結果金ができるのかもしれない。小生は定食Aを食うことの出来るような金を得ることができれば、この上ない幸である。このようなことを書くことはくだらないことであるが、小生の金に対するほのかなレジスタンスであると思ってもらいたい。

◇ ◇ 早坂 鉄太郎

葉学。これは今日数え切れない程沢山ある職種或いは学問の分野に於てどんな存在意義を有しているであろうか。この事を一応認識しておくことも無駄ではない。否必要なのではないだろうか。この点について機会があったら諸先生方に雑談的にでも伺いたいと思っている。

◇雑談◇ 井原 智司

俺は何しに仙台へ来たのだろう。寝ながらこう考えた。勉強しに、いや、勉強したいから、はるばるこのみちのくまでやって来たのだろうか？いや決してそうじゃない。ぞれなら何のためだ。又考えてみた。俺はちょっと旅行でもするつもりで汽車に乗って入学試験を受けに来た。未だにその気持が抜けない。旅行、たしかに人生旅行に違いない。旅行は楽しい、俺はこれで満足だ。まあ四、五年仙台でゆっくり遊ぶことにしよう。遊びながら人として生きるべき道でも考えてみよう。

十七音の戯れ



壺屋 丁兵衛

四十人はげたアリババ先頭に
何んと全国からはせ参じた逃族共の多かったこと。我も又逃族の一人なるか。「開けゴマ」。ここに何か新しい境地が開かれる様な気もする。

バス揺れて飯が自然に消化する
朝飯を食い、バスに乗れば胃のお世話にならないで、いやそれ以上に程良い消化作用があると云う。「悪路のため揺れますから御注意願いまーす。」

食って寝てソフト・ボールの薬学科
「俺は違う」という人がいたら失礼。昨夏の作。夏休み以前はどうも腰が落ち付かずフラフラな時期を過ぎたものだった。

ああでもないこうでもないで一時間
「一時限」としたいところだが、ここでは出来ない。ともかくも実数を切断してスーフにして食うと旨いそうである。(スーフ; sup.上限のこと。)

録音機以上の精度名調子
生物のO教授の講義たるや正にテープレコーダー以上である。その眠るが如き名調子を聞いているとこっちまでついつり込まれて……。

講義中寝ている馬鹿に寝ない馬鹿
入場料を払ってまで寝ているのが〇〇なら、起きて聞いているつもりなのも〇〇ではなからうかということ。「同じ馬鹿なら寝なきゃソソソ」なんてのはいけません。

独逸語は「ゲルト」「メツチェン」まず覚え
あと「トリンケン」を覚えれば十分という低能振りです。それにしても國連か何処かで「日本語以外は言葉として認めない」なんていう決議が出ないのですかねー外国語はどうも苦手だという男の空想。

【走り書き】 林 春 江

一四月の思い出

…上旬…

願書を取りに三番目。検定料仮受領書番号三。受験番号九。さんざん苦しんで入るとは誰かのありがたきこじつけだったが……。

…中旬…

受験第二日目の帰路。秋保バス。ある人曰く「明日もこの調子で行けば大丈夫」大きい声だった。そして「時間中落雷の近さを測っていた」と。周りの人は如何に聞いたか。確かにすごい雷雨。だが、ちらと眺めただけで貼札9なる机に向っていた私、まして明日に自信なき私だった。その調子で行ったろう人—Sさんである。受験、Sさん、カミナリーものすごいものばかり。

…下旬…

入校式。おだやかな空だった。秋保バス。H先生—かつて教をいただいたのだったが…。S、K、H各二人ずつ一同じ式に出るとは知らずじろじろ見たから大部印象鮮やかなものだ。ボロバス乗車50分は限度だ。西多賀で下車。バスは正門前まで。H先生下車。八番教室。入り際でにやりとしたTさん。黄色のコートを着て私の前に座って居たKさん。お母さんと来たWさん。お姉さんと来たMさん。下駄で来てはだしになったKさん。堂々と書類を貫いに出たでかいSさん。あとは一切誰がどこでどうしていたか皆目思い出せぬ。暫いささか緊張して居たと覚えているが。H先生の出現、はては長時間にわたる話、この間、バスでの一秒の所作—おじぎ—の省略を悔いた。以後は勿論最敬礼。しばらくして二三人が時を異にして問うた—H先生を私の父ではないか—と。

これらかそけき四月の思い出である。

強力 殺菌・殺蛆・防臭剤

糞を撲滅することは

消化器系伝染病を少くする第1歩!

(包装…200kg・18kg・500g・220g)

厚生省指定消毒薬

ネオ **メソゾール**

三丸製薬合資会社

仙台市東三番丁

昭和 32 年度薬学科生名簿

15 ページ

思うことなど

草野源次郎

中学三年の二月、二回目の手術を受けて入院していた時のことだ。隣のベッドの人が「あなたは都会育ちですか」と問うてきた。「はいそうです」と僕は答えた。しかしそれは全くの嘘で、一步も村から出たことのない農村育ちだった。その時から本当のことをいえばよかったという考えと、あの答え通り都会育ちであればよかったという考えで悩み続けた。そして農家の子という境遇に嫌悪を感じるようになった。そんなある日、高校二年の夏だったと思う。「少年期」を読んでいると、百姓がいかに貧乏で、人間味がないかをいっている一文に接した。僕は強い反感を抱いた。「貧乏で情知らずの人は、どんな職業の人にもいるんじゃないか。百姓にその種の人が多いとしても、百姓全体を貧乏で、情知らずと決めつけたようないい方をするとは軽率ではないか」と繰返し憤慨した。その後、僕の運命も変り、主に体の弱いことから進学することになった。東京に出て、受験生活を送った。その間、都会臭のする自分に接しては、何か罪を犯しているような気持になった。学生や共産主義者、社会主義者が「民衆のために働く」とか「農民を指導する」とかいうのを聞くと、「彼等は民衆を知っているのか。農民を愛しているのか。かって軍人が天皇陛下のためと云って、天皇を利用し天皇のためにならないことばかりしたと同様に彼等もまた民衆のため、農民のためと甘言で眠らせ、自分達の慾望を満足させるのではないか」と疑った。リックを肩に掛け、タバコをくわいて、アロハ姿で僕等の村の経済状況を調査に来た大学生に接し

ては、「官僚学生め、それじゃお上のお調べじゃないか。社会主義とか共産主義とか新しい事は知っている。然し官僚根性から解放されていないじゃないか」と反感を持った。

私達はある人から、何か強い印象を受けると、それをもって、その人の全人間を判断しがちだ。人間がそんなに単純であり得ようか。悪人にも良心があり、盗人にもやさしい心があるというのが人間の特徴じゃなからうか。良い点が多くある人とか、意地悪な面よりやさしい面を多く持っている人という事はいえようが、全くの悪人とはいえないと思う。いわんや、ある百姓からひどい仕打を受けたからといって、百姓全体を貧乏で人間味がないと評価するのは、軽率だろう。同様に、調査に来た大学生の態度が少々傲慢に見えたからといって、官僚根性の塊の如く判断したのも間違いだし、一人の学生に接して、全部の学生が官僚根性から解放されていないように考えてしまうのも、全く軽率だ。また私達は、自分の内にある人間性の好ましくない面に気付くと、罪の意識を持ちがちだし、他人にそれを見ると軽蔑しがちだ。例えば自分の内に獣的なものを発見すると罪深い人間のように感じ不幸になるのである。勿論それ等は無条件に是認されるべきではないが、寛大にとりあつかわれてよいのではなからうか。環境に都会育ちがよいと教えられていた僕が、百姓育ちの境遇を嫌ったのも、人間性に率直に生きたといえると思う。後で僕が一生懸命故郷を愛そうとし、都会臭のする自分を警戒したが、そこから一体何を学んだらうか。自分の内にこもり、宿命論者になり狭い愛情しか持たなかったのだ。

結局、僕はこんなふうに考える。強い印象を受けた人を評するときは、しばらく冷却期間を置いてからにしよう。自分の内に人間性の悪い面を発見したら、あまり大きさに考えず、誰にもあるんだと考えよう。他人にその種のものを見たら、自分にもあることを自覚しよう。

結核の長期治療に

新型パスの完成!

本剤は世界最初の新型パス剤で 小児結核のパスによる完全治療と、結核の長期治療を可能にすると共に 次の如き特徴を発揮する

- ◆顆粒は苦味が殆んどなく、非常にのみ易く、水剤用は甘く乳幼児に好適
- ◆胃腸障害が殆んどなく、長期服用が可能
- ◆有効血中濃度はパスカルシウムより更に長時間持続し、治療は一段と効果的
- ◆カルシウムの効果を同時に発揮する

世界九カ国 特許出願中



〔包装〕 顆粒・水剤用

NCAI

大阪市道修町 田辺製薬株式会社 支店 東京・福岡

「皆様大変お疲れ様でございました。ここが八荷峠といわれ十和田湖の入口でございます。又湖を一望のもとに見渡せる展望台の一つです。」とガイド嬢は十和田湖にさしかかった事を知らせてくれた。九十九曲りというジグザクな坂道を下り、左手に湖を見ながら、しばらくして第一休憩場の休屋という所に到着。道中我々を魅了した秋田美人のバスガイドともお別れた。

目前には満々と水をたたえた湖が横たわっているではないか、ぼくは畔を目ざして無意識のうちに突進していた。しばし畔に立つてその鏡のようになめらかな水面を我を忘れてじっと見つめていた。なんと雄大な姿なんだらう。煙と騒音の中で育つた僕には想像もつかなかった大自然だ。トボトボと又橋の方へ向って歩いていた。ここは遊覧船の着く所であるからかなり深い。ぼくは視線をぼおっとかすんだ対岸から徐々にずらし足下に来た時おもわず「おゝ」という驚嘆と恐怖の言葉をもらして一歩しりぞいた。というのは淡緑の水があまりにも透きとおっていて、小さな砂利までがはっきりと見え、じっと見つめていると引込まれるようになったからだ。

ここには「湖畔の乙女」と称され十和田湖の象徴と云われている高村光太郎先生の「智恵子像」が湖の畔に立っている。この像は青銅の二体からなっており、二人の若さにあふれた悩み多き乙女の姿をあらわしているように思える。反面光線の当って黒びかりに光っているログンの彫刻を思わせる筋肉の盛り上りを見ていると、力動にあふれ、人間のような生き生きとした感じを与える。この動と静のよく調和した姿を見ていると何時しか時の立つのも忘れてしまう程だった。この像について佐藤春夫先生の作詞した歌をあげてみよう。

「湖畔の乙女」 花か紅葉か 水も清らか
あわれいみじき 湖畔の乙女
二人向かいて 何をか語る

遊覧船にのり湖上の人となる。今までと逆に湖上から陸地を見るのも又格別だ。頃は初夏青葉の季節であった。次から次へとあらわれては消えてゆく対岸の絶景。その緑一色を背景に光の強弱により変化する湖水の青い空色のような適切な表現の見当らない色一日陰のどす黒い、ぶきみな色、船の通った後に立つビールの泡のような爽快な白い泡一はここを訪れた者以外はよくわからないだらう。この湖の特徴は、水面の高さが一定な事と、透明度が大きい事と対岸の緑にあまり変化がない事だそうだ。

小野小町の系統を引くと思われるようなガイド嬢のノドから流れ出る甘いメロデーが対岸からこだましてくる。素朴な人間の姿だ。船は音もなくすべっていく。

焼山で一泊とのことだったが、薦という温泉まで歩くことにしたのだ。もう太陽が西の山々に近づいて、体中は汗でびしょりだ。心もいらだたく、快かった肩の荷さえも、もう重く不快に感じる。だらだら単調な坂道は行けども行けども青々とした森の中に続いている。私達はその単調さに飽きた。然し歩かねばならないのだ。機械のように足が前に出る。温泉の魅力が我々の心をかきたてた。私は自分が独り風呂に入っているのを想像しながら腕に入っている。幾回か角を曲ったがその度に温泉を期待した。と突然目の前がひらけ出した。今まで気付かなかった空が青い森にコントラストして美しい。向うには雪隠特有の大きくがっちりした家が目についた。

人なつこくして一人一人が大変美しく見える女の子がいる。修学旅行の高校生に違いない。こんな山奥では予想もしなかった。我々は大学に入りたてでコチコチしていた。それで一層固くなって「どこから来たのか」とか「荷物をもってやろう」とか言うのにろくに返事もせず、ほうほうのていでキャンプ場に入る。

太陽は沈みかかってあたりはもう薄暗い。キャンプ場は湖に面してその周りを大きな樹木が囲んでいる。向う側に大きなテントが張られ、その前では火をどンドンもして、男女の高校生が歌う合唱が聞えてくる。その歌声が周りの静寂をつき破いてしんとした森の中にしみ通って行った。湖の静寂さは言うに及ばない。我々も早速テントをはり、食事の用意に取りかかる。今晚はカレーライスだ。

食事も終り、温泉風呂にも入って来たし、あとは寝るばかりという時、私は一人起きて外に出て見る。空には無数の星が輝き、銀は星明りでぼおっと見える。私はこの静かな絶大の境地に浸っているのだ。大自然がこれ程まで私の心をとらえ、このような神秘の世界に連れて来ようとは、私は今までにこんな経験はしたことがなかった。昼の疲労も忘れてしまった。これが旅でなくて何で味えようぞ。幾百年の昔の西行法師だって、また芭蕉だって、この神秘的な気持が好きで旅を愛したのだらう。そう思いながら私は湖のほとりにたたずんでいた。湖が私の若い魂を呼んでいるようだ。

大自然の前にはおのれの小さきを知り、恥じ入る。確かに私は大自然の神秘にとりつかれている。私の頭の中は狂ってしまいそうだ。

ああもう二度とあの雑踏の音に帰りにたくない。故里を遠くはなれてこの恐しい程の静けさの中にひたっていたいのに。

もうあたりのテントからの話声も聞えず、輝く星空の下に、湖は静寂しきってたんたん水たたえていた。

酒

「百薬の長と飲みかしうまし酒、天の美録と伝へ来しものを」誰が詠んだ歌か知らないが兎に角一番多く酒を飲む國はと言えば、勿論フランスである。これは世界でも桁はずれで一人当たり年消費量は一斗四升九合、それに続いてイタリーの五升九合、米國三升三合、英國二升五合、さて日本と言えばわずか八合二勺にすぎない。この中でいずれの國が一番文明が進んでいるか知らないが、とにかく酒は文明の結果であり決して原因ではない事は誤らない事実であろう。わが國で酒と言うと冠婚葬祭とか神事仏事とかお祝やドンチャン騒ぎなどとか何か異常な場合と関係してのみ考え、酒を飲むことを何となく脱俗的なものとして考える。アイヌ語で酒のことは、カムイワッカ（神の水）と言うし、フランス語ではブランデーのことを「生命の水」と言う。いかにも人間くさくて考え方の相違が面白いではないか。さて日本古来の酒、日本酒について言えば同じ米で造った酒でも中国の「老酒」は酸味も押しも十分に芳醇な白ブドウ酒に似た堂々たる風格を具え、年を経てますます醇化するから古いものほどよい。それに引きかえ日本酒は寿命は短く他の世界のいずれの國の酒も古いほど品質が良くなるのが通則であるのに日本酒に限って一年きりである。それも冬に造り春に出来上っても夏前はいわゆる「新酒」

の香味が強くて良くない。土用を過ぎて新秋九月、いわゆる「冷おろし」の時期の味が最も良く、暮から翌年になるとすでに「古酒」の香味が強くて出すぎてうまくない。この様に熟成に重きを置かないために味の喰い切りが悪く、甘味一方に傾き殆んど砂糖水の様になってしまっている。然もその品質たるやいたってヴァレエティーにとほしく全國どここの酒でも個性を忘れてすべて一色の風味となり辛口甘口と言ってもその差は紙一重にすぎない。やはりよほど嗜好に自由性がないか、或いは統制好みな国民性といわれるかもしれない。禪家に家常茶飯事という言葉があるが、外國の連中に言わせれば家常酒飯事と言うほど飲酒は食事と同様に当り前のことであるのに、日本酒の普及しないのはアルコール含量の高すぎることによると思う。ビールは2~4%、ブドウ酒7~14%。それに較べると16~15%に税法で定められてしまっているのだから下げられない。仮に出来ても味が淡白であるために風味が調わなくなって飲めない。いわばアルコールの味だけで持っている様なものである。又この強アルコール性は婦人に向かないことである。婦人に酌をさせ男子のみが良い気持になるという様な日本の家庭に於ける封建性は実に日本酒の宿命的なものであると考えるのではなからうか。

酒 井 格 一

趣 味

小 野 寺 威

小さい頃、父が友人と碁盤に向いあっているのを、よく傍で見ていた。彼等の終ったあと、一緒に見ていた兄と、「囲めばとれる」の原理しか持たぬあやしい競技を興じた。その内に父が教えてくれるようになったが、17目もハンディキャップを補っても負けるという不思議さは、段々負ける口惜しさに変っていった。負けた後は盤上にみにくく並んだ石を、両手でかきまぜるのが常だった。ある晩など、ついにたまりかねた父が、僕を外に遣い出した。口惜しさは強さを呼ぶようになった。父とも星目、八目、と強くなり、三年程でタイに持込んだ。それとって刺激の少い環境だっただけに、囲碁には思う存分夢中になれた。天井のふしあなは敵石に見え、教科書の文字は、白黒の葛藤を想像させた。勉強最中に途方もない方向に考えがそれて、損害も馬鹿にならなかった。相手としては兄達三人が丁度良かったが、彼等より僕の方が先にのびたらしい。彼らはよく僕にやっつけられて憤激した。最も冷静だった次兄さえ、「まった」をはねつけられて、散々敗北して僕をしたたかなぐった。不思議にも僕は平然としていた。反対に僕が取けると、碁盤の石をどった返して、果てはひっくりかえして、石をふみつけた。我々の勝負はその連続だった。そして共に「だれがお前とやるものか」という。然し

次の日は、碁盤にいつとはなしににじり寄ってくる我々だったが…。受験期は碁やめるべしの誓を立てた。それ以後二年、斑点まじりの空白がつづいたが、その斑点のお蔭かあまり腕は下らないらしい。入学以来、旧味はしゃぶりつくしたし、誰彼となく、ひま有ることに對抗して来ている。恐らく僕に因する限り、碁に勝ったとき、特に宿敵を倒したとき程、嬉しいことはない。それは恋人を約束通りに発見した瞬間の喜びである。長い間心に期していたものが現実となって現われ出した喜びである。正に人生の最良時である。反対に、敗れたときは恋人を云々……即ちその反対の現象を呈する。競技は普通二時間から三時間も60センチ平方だけを見つめつづけるのだが、その間さまざまな相手の感情が碁石の動きとなってあらわれる。その動きは、人間そのものを示しているかの様である。追いこむとき、追いこまれるときは、思いなしか、顔への表情ともなる。然し紳士間では普通、最後に皮肉な口ものをつり上がりに対して沈痛なたてじわとなる様だ。最近だんだんこの運の少い科学的な競技が世に拡大されつつある。特に碁に幾何学或いは確率学的なものを発見して興味をもつ人も多い。或いは大相撲の星取表を想像する人もあろう。薬学科第一期生の想像は、映画の題名であろうか。

碁

蜂の巣

水 柿 道 直

暮もおし迫った或る日、風呂場の脇の天井裏にあったすずめ蜂の巣を取払った。すずめ蜂というのは、体長約3センチ、足長蜂の足を少し短くしたような蜂だ。そして足長蜂よりは胴が太い。足長蜂ほどの均整のとれたスピード感はないとしても、その引締った精悍な姿は見取で、一種の恐怖さえ感じる。腹は六枚ほどの殻で覆われ、黄橙色と焦茶色の縞模様がついている。さらに、胸にも腹にも同じ黄橙色の極く細かい毛が密生しており、その毛並が光の中で金色に輝いて焦茶の縞をひきたてるのを見ていると、背筋がぞくぞくとする。或る本に「刺されて一番痛いのはすずめ蜂で、土蔵や寺などの軒下や大木の枝に直径35厘もある巣をかける。また時には土の中や石垣の間、朽木の洞穴の中などにも巣を作り、何十何百という大家族で社会生活を営む」と書いてあった。

ところで、僕の家に作られた巣は茶釜のような形をしていて、一番太い所では40センチ以上もある素晴らしい代物だった。外からはほとんど見えない桁と垂木の間の隙間をくぐり抜けて、かくも大きな巣をよく作ったものだ。また、風雨の心配のないこの場所を選んだ選択眼の良さにもいささか驚いた。家の附近には以前から蜂が多かった。僕が幼かった頃には、よく刺されて泣いたものだったし（もっともすずめ蜂にはなかったけれども）、数年前隣の家の庭木に、やはりすずめ蜂の巣が出来たこともあった。もしかしたら、今度の蜂は隣の庭木にいた蜂の子孫かもしれない。

この蜂の巣がいつ頃できたのか分らないが、夏休み中に気がついた時には既に完成していた。当時は蜂が威勢よく飛びまわっていたので、とても手がつけられなかった。仕方なく、夜天井の上でBHCを撒いたところ、次の日十匹ほど死んで地面に転がっていた。しかし依然として軒下から出入する蜂の数は多かった。夏から秋にかけて、更に二・三回BHCを撒布して寒くなるのを待った。僕が巣をとるとは言ったものの、1センチ足らずの針が恐くて躊躇している中に暮になってしまった。巣は静かで蜂の影は全く見当らなかつたが、最初スコップをいれる時には今にも飛び出して来るだろうとびくびくした。ところがどうだろう。サクサクとまるで雪の中へスコップをたてるような意外に軽い手ごたえがあるばかりで、蜂は一向に出てこない。一面に茶と白の波形の模様のついた芸術品の主は、もはやそこにはいなかった。数匹の蜂がほこりの中に入れていた。大半の蜂は子がかえるのを待って、どこかに移住してしまつたらしい。おかげで作業はすこぶる楽だった。屋根板にくっついた蜂の上部以外は取るのに何で

もなかつた。巣は松の幹の肌のようなうろこ状なもので囲まれていた。そのうろこの中央を横に白い縷が走り、それと平行に黒いすじがついている。あたかも絵具をよくまぜずに、じかに筆をひいたような線だ。それが幾つも積重なって楕円体を作りあげていた。外観はいかにも重そうだ。しかし実際には500グラムしかなかった。巣の内部は更に驚くべきものだった。白いうろこで出来た平らな板が五枚ほど整然と積まれてあった。丁度、円いお盆を逆さにしたような形だ。それには鉛筆の太さ位の、蜂独特の六角形がぎっしりつまっていた。その数がいくつ位か数えてもみなかったが、各層ともほとんど口が破られて空になっていた。

この巣はある学校におくた。家を追われたすずめ蜂は今頃どこかにバラックを建てて冬を越していることだろう。今度巣をかけるときには、迷わずに大自然の中を選ぶ方がいい。人目につかぬように。

お山の杉の子



百 瀬 和 享

日中はまだまだ木陰が恋しい昭和20年の9月であった。家人に教えられ京王線の下高井戸、当時は日大前といっていたが、その駅前に行ってみた。幸い自分の家は残っていたがやはり駅前となるとあたり一面の焼野原、バラック、次に敗戦、そこに残された人々はその日、いやその瞬間を生きぬくにも困難であった最中に、威勢の良いのは焼跡の雑草だけであった。人々は遠方に暮れ、声を出すにも疲れを感じたその中に、唯1人、本当に唯1人、マンドリンを伴奏に見知らぬ老人が焼跡の土台石の上で歌を歌っていた。「昔々、その昔、椎の木林のすぐそばに、小さなお山があったとさ、あったとさ……。」まわりには、附近の子供達が犬勢集っていた。数人の大人も混っていたが、何やら紙切れを一心に見詰めていた。弟と家を出る時母からもらってきた幾許かの銭と、当時品不足であった紙をその老人に手渡した。引替に呉れた紙にはあまり上手とはいえぬ字でプリントしてあった。紙の質も今は比べ物にならないものであったと思う。今の記憶ではその点明らかでない。この老人は本当に真白な髪であり、終戦直後とはいえ身なりは割合に小ざっぱりとして、歌っている様子にも何の暗い影も見えなかつたので、歌こそ歌っていなかつたが、集まっている人々の顔も何となく明るく見えた。

さて、自分のもらった紙にはお山の杉の子という歌の歌詞が書いてあったが、その後この老人は、殆んど毎日ここに来ては種々の歌を歌い歌を印刷した紙をわずかの金額で配っていた。自分の音楽に対する眼はこの時開き始めたようなものである。



た め い き

荒 川 睦

あいつらがどんなやつであろうと
そんなことはどうでもよいのだ
あいつらがどうなろうと
そんなことはなおさらどうでもよいのだ

とにかくおれはまいってしまった
いまさらどうしようもないのだ

それというのもおれに意気地がないからであるが
せめておまえを愛することが
ごく自然であることを知るがいい

噓 生きていた おれは生きていた
無限の前に胸を張る
ためいきは夜の沼に消えて行った

やがてさすがの東京も白く被われる頃になったが、例の老人はやはり歌い続けたが、もうあの明るさは見られず、ボロボロの国民服がひとしお人々のあわれる呼んだ。マンドリンの弦もはや数本切れていた。群集に励まされて歌っている様子であった。終戦の荒波は一足遅れてこの老人を訪れたのであろう。もはやその時は、再建の槌音が昼夜を徹して鳴り響く頃であった。その後この老人の話が一度新聞に載ったが、その後いつとはなく人々の記憶から去ってしまった。

人工衛星の飛ぶ今日では左様な人をついぞ見かけたこともなければ聞いた人もいない。それだけ世の中が厳しくなったのか、町の歌うたいなどは商売ならぬかも知れないがこの老人は少くとも金のためにしたのではない、あの混乱した社会を見兼ねて始めたのだらう。割合身なりの良いのは焼け残ったのではないかと思う。だがやはり敗戦の犠牲となった。当然のことであらう。今日の世に斯様な人が居るだらうか。ただ自分の富を増すために血眼になっている者ばかりである。入学試験の競争率もその一種のあらわれではなからうか。するとその点では昔の方が暮しが良いのであったに違いない。新聞に「いどへい」という話があった。つまり「井戸、塀」のことである。明治の頃、文明開化の音も村の方までようやく聞える頃、代々の家の息子が政治に手を出し、社会奉仕に働き、残ったのは処分に困る井戸と塀だけであるという笑えない話であった。今の政治家は家を新築するであろうと補足してあったのには全く同感である。でも昔の方が良いとは一概には云えないのだ。暴力団の殴り込みも、吉良の屋敷を襲ったのも同じようである。日本はいつでも武士気質があるかもしれない。その気質を社会の為に用いてもらいたいと思うのである。

初 夢

久 保 守 正

或る大学に、非常に無情な教授が居た。彼は彼の科目の試験を受ける学生をすべて、合格させなかった。つまり、次の様な自己流の規則を作っていた。一つの問題を出し、もしその答が正しければ、その学生を「再試」にし、もし間違っていたら、勿論落第させた。所が、或る日、彼は或る学生に「お前はどうかと思うか」と、うっかり質問してしまった。その学生は、非常に賢明であったので、「先生は僕を落第させるだらう。」と答えた。そこでその先生は考えた。この学生の解答は正しいのだろうか。いや、もしそうなら彼を再試にしなければならぬ。それでは、その解答は間違いだらうか。いや、そうでもない。なぜならもし間違いなら、彼を落第させなければならぬが、そうすると彼の解答は正しいことになるからだ。そこで、その先生は、仕方なくその学生を合格させた。

この夢から感じた事は、やたらに帰謬法を使えないという事だ。つまり、その学生の解答の正否を決める場合、まず正と仮定すると矛盾に到着した。ここで故に間違いであると言いたい所だが、実は上の通りそうはいえない。だから上の問題で帰謬法を使うという方針ならば、まず先生の出し得るすべての問題の各々に対するすべての可能な解答を考え、それらの解答がすべて正しいか間違いかのいずれかになるという事を証明してからでなければ帰謬法は使えないのだと思う。僕は今まで、特に数学の証明問題に、好んでこの帰謬法を唯漫然と使ってきたが、これは、厳密にいうと、いけなかったのだと思う。つまり、「……が成立する事を示せ」という問題に対して、もしかすると、成立でも不成立でもない何か第三のものかも知れないからだ。

徒然運筆

明けて昨年創設になった薬学科に、いわば機関誌が発行されることになった。まあ創刊号だということで、くだらないことでも書いてみようという気になった。元々文はいたって下手な方だし、表現技術といったって、そんなものは皆無に等しいので、まとまりのないことになるだろうことは、最初から承知で書いてみる訳だ。

何と云っても僕等にとっての最大の魅力というか期待は、一期生だということではないだろうか。この点については、諸氏は十分な自覚を持ち希望に溢れていることだろう。或いは就職して社会に出るのもよし、或いは研究室等に残って真理を探索するのもよしだ。歩む道は十人十色だからな。だが単に就職への課程とか道具とかと考えるような、雰囲気というか性格というかそういった空気にしてしまっただけではないと思う。具体的な線となるとまだ僕は持ち合わせてはいないのだが、積極的建設な意見や抱負を持ち寄って、お互いに述べ合い交換する為の場が欲しいと思う。そして東北大学薬学科の特色を築き上げ強く押し出して行こう。全体の力で盛り上げて行こうではないか。国際的発展を。

とか何とかいきまいたところで、つまるところは、食う為には通らなければならぬところ、というのが大学に対する一般の見方だし、実際そうなんだから仕方が悪い。とも思うな。食う為には仕方がないか。大学のお偉方よ、何を考えているか。雀の涙の俵給で女房にも食わせにやらんし、本も読まなきゃならんしさ。管を巻き、ニコチンを宿して女をたらし込んで世の凡俗とあまり変りない様だ。男と女と、人間一度むけばミソクソ同じだとき。でも人工衛星が飛んでいる気のおけない時代だ。科学するアオヒョウタンも必要なだろう。サルよりも毛の三本多いのが、この地球とかいうところに生まれ出た時から、貧乏くじを引いてしまったこのオモチャの軍隊いや自衛隊のいる國にもねえ。

一体この先、国際政局はどうなるのかなあ。ままたらぬ世界状況は誰にも見当がつかないか。星条旗とアカ旗が競走して、スパーニトクが勝った由。はたしてなぐり合いは有りや無きや。クリスチャンに云わせると、世紀末(何時のことか僕には分らないが)に人類滅亡のときが訪れ、その時キリストが再来して救うのだとき。肉体は滅びるとも靈魂は云々だからな。馬鹿々々しい。こうなったら哲学も宗教も何もかもあったもんじゃないな。文学者にして人工衛星を論じたら「宇宙バカ」といわれたそう。もっと地上を見よという意味らしい。併し科学の発達は何にも増し

で最高の価値を有すると思うのだがな。一体科学の産物を政治家が動かすというのはどういう訳だ。大体政治家なんでものは、私腹を肥やしビール腹を突き出して適当に遊ぶ奴のことじゃないか。政治屋だよ。人間はずるくなきゃ生きてゆけないよ、だってさ。人間生きる義務があるとでもいうのかね、死んではならぬという法律があるわけではないんだから死んだっていいじゃないか。なあ。どうせ死ぬまで生きるんだから。こうなるとガツガツのガクモンも、ブラブラのヘチマもなくなっちゃうな。そこで酒飲んで女と楽しく遊べ。てなことになるようだ。それにしても大学を出なきゃあ、とやられるからな。いやはやどうも。しかし平凡な毎日毎年も、年齢多くなって振りかえってみれば、そこはかなり自分が七転び八起きして来た路だ。他人には分らない或る味があるらしい。雀も悪しきも幾歳月か。

映画の題名になったが、一体映画とは何だ。映画芸術と殊更に銘打つところを見ると、濃艶なラヴ・シーンの押売りが関の山らしい。下らぬものでも色気を出せば三文映画もよくヒット、というのは冗談だがね。ついでに麻雀といくか。麻雀とかけて何と解く。同義と解く。心は、徹夜でやり通す。旅の夜汽車とかけて、ああ東京午前3時のバーと解く。心は、だらしのないことこれ相似たり。寡婦とかけては処女ととく。心は、男がいらない。やに下ってしまったが次はどうか。売春汚職職員とかけて何と解く。那覇市長リコール運動と解く。心は、メリケン式民主主義。ところで日本人の精神年齢はやっとならぬと20才だというのはどういう意味なのか。毛唐の奴等、僥倖をチャンコロにしまった。それもそうかもしれない。岸の野郎、権力の座？についたら、こおどりして外国でせつせと遊んでやがらあ。こんな類のことは考えても考えても回り灯籠さ。天をも貫ぬく学徒の意気、飲をも焙かす若人の情熱なんてものは、とどのつまりは何が何して何とやらでね。

まだ大雑把にでも話したいことは沢山あるが、何にもならないような気がしてきたので止めておく。だが俺もケツがアオくても、人生論を一席ぶってみたい。なんてでかいことをいってこれは失礼した。

—風来坊—

雑誌題名と表紙

雑誌題名については編集部内でも随分決定に苦労したが、ラテン語 Amicos (友達、味方)を選んだ。これから派生した Ami (フランス語)は御存知の方も多いことと思う。

表紙についても応募作皆無のため、単色という制限の中で、なるべく無難なデザインを描いてみた。ダーク・グリーンが旨く出ればと願っている。別に大それたイメージがあったわけでもないが、緑のためのプレリュードとでもいった感覚を表現しようと考えてみた。(村田)

黒い蟻

吉井根

久世はこの釣橋の上からぼんやりと河原の水の流れを見ているとき、ほんとうに救われたような気がするのだった。学校や家人との交際で色々厄介な事に Ause すときここにやってくるのだが、ここまで来るとそんな煩しきから全く解放されるので、一度に疲労感を覚えて2,30分も立ち止まっているのだった。

× × ×

この釣橋はY市から電車で1時間位の郊外にあった。その近くには名の通った温泉場もあり公園などもあって、春秋のシーズン中には遊覧客で可成り混雑するのであるが、11月の下旬にもなるともうめったに訪ずれる人もなかった。このY市のある北陸地方は1年の3分の1は曇天で、晴れ渡った日というものは本当に数える位しかなかった。

いつもどんよりとした鉛色の雲が地上を圧するように厚く覆い被さっていて、全てのものがその下でようやく息を吸っていた。道行く人達にもぶい魚の腐ったような目付をして卑屈そうに背を曲げて歩いていた。彼等からは人間というよりも奇妙にかさかさした、それでいて粘っこい異物という感じしか得られなかった。

この異物感は今、久世のいる谷間にも満ちていた。折り重なってあたりを取りまいてる山々と、その上にまばらに生えている樹も地獄の中の光景のように空虚で寒々としていたが、それでいて奇妙にきびしい調和を示していた。

午後間もないというのに谷間から吹き上げてくる風は山影の冷気を運んで釣橋を無気味にきまかせていた。二本の細い鋼鉄のロープの上に3寸ほどの間隔をおいて板が渡してあって、手摺には藤藁が用いてある。このつり橋は、臨んでからも長くたつのか藤藁が水分を失ってかさかさしており、踏板もところどころ腐り落ちていた。踏板の間から30尺下り水が岩と咬み合っているのがちらちら見えて背筋を水らせた。ちょっとした風にも左右に激しく揺れて土地の人でも尻込みするこの橋は、それでも隣村との唯一の交通路で10箇の橋を1日に数回食料品や魚類などを運んでいた。

× × ×

今日も又久世は先程からここにやって来て、もう20分ばかりも水の流れを見ているのだった。

久世は足を広げ、両手で関節が白く見えるほどしっかり

と藤藁を握り、胸を手摺に押しつけていた。彼の重みで30度ほど上に傾いた橋桁は谷間からの風で左右に振動していた。

谷間の流れは夏からみればずうっと水量が少なくなっているものの、相当の勢があって岩にぶつかって水繁吹をあたりに散らしていた。比較的穏かな所では水の泡が浮んでいて、それは何時頃から浮んでいるのか、もう水垢ですっかり茶褐色になって同じ所で静かに円を描いていた。

さきほどから瞬もしないで眺めている久世の目にはその泡がだんだん速度を増し、円が外に向って拡って行くように見えた。

ものすごく加速的に動く泡に比べてその円運動の広がり刻々、徐々に規則的に拡がって終に視覚一杯に拡がる。くらくらとした感じに襲われて目を凝らすと泡は以前と少しも変わらない大きさでゆっくりと廻っていた。すると又だんだん大きくなっていくように思える。そんな事を何度も繰り返して眺めながら、ポーの「メールストロームの渦中遭難記」の渦巻のことを考えていた。それも又知らず知らずのうちに芥川の「齒車」の中の齒車に変わっていた。

その時右手の方でなにか叫ぶような物音がしたように思えた。しかし咄嗟久世にはそれが何の音なのかよくわからなかったが、その音が久世の脳の大皮質の1つ1つの細胞に反響して、今まで意識されなかった水の音が突然吼えるように響き出した。その響と共に泡が急速に廻転して脳細胞が逆立ちする様に感じた。久世は何か言ひ知れぬ恐怖に襲われ、それから逃れようと激しく身振って迎を見廻した。右手の空間を何か赤い細長いものが一直線に落ちて行くのが目に入った。それはだんだん早くなって行くように見えたがなかなか落ち切らず、落ちるまで何か無性に長いようで歯痒かった。それも又久世に不安感を与えた。にぶい音を立てて落ちた物体が河原の石の上で匭いていた。それをよく見極めようと目を凝らしたが、まだ久世の脳では細胞が廻転しつづけていた。久世は急に不快になって背立たしように頭を左右に動かした。それが人間であることがわかるまでには少々時間がかかった。真赤な毛糸のセーターに紺のスカートをはいた18才位の女学生が腰を打ったらしく、俯伏せになって倒れめくれたスカートの下から見える白いズロースが目にしみるように印象的であった。そこ

からくの字形になった肉付きのよい股がむき出されていた。赤いセーターと白いズロースが強烈な調和をなして彼の性欲を刺戟した。下から盛り上ってくる快よい性欲にひたりながら助けることも人を呼ぶことも忘れて、久世は身を乗り出すようにしてしばしこの美しい張子の人形を眺めていた。無意識に人のいないのを確かめて崖を滑り下りながらも、久世の頭の内を占めていたものは助けようということではなく、ただ弾力のある股を撫でてみたいという欲望だけであった。この美しい突然の贈物を他人に渡すことなく人知れず自分一人のものとして独占したかったのだ。後めたい感じが久世の脳細胞をかすめたがもう自分で自分を処理することが出来なかった。一度盛り上った性欲はただ単に眺めるだけでは承知せず、久世を駆り立てずにはおかなかった。この人形の贈物は神が自分に与えたものだと信じ込もうとした。久世は無神論者で通していることも忘れて、この場合神を持ち出した自分に深い満足を感じた。神が彼の最後の倫理感を吹き飛ばしたのだ。

ちょうど幸いに人形は河原の比較的岩の少ない小石の上に右手を胸の下にして横たわっていた。血を流している形勢はなかったが、全身を波打たせ苦しげに呻吟しながら左手を伸ばして頭上の砂を無性に掻きむしっていた。目を閉じた。白い美しい横顔に赤味がかった頬と口が規則的に痙攣していた。伸びのよい小麦色に磨かれた股はピクピクと神経質に動いていた。この美しい人形は全体が規則的に驚くほどの正確さで動く機械であった。キラキラした血走った目でみつめていた久世は股の上に1匹の大きな黒い蟻を発見した。ももは11月の谷間から吹いてくる風で鳥肌だっていたが、そこには完全に大人に成り切った女だけが持つ一種異様な全てのものを魅惑させずにはおかないような肌の香気が漂っていた。その上を蟻は細い足で重い大きな腹部を支えながら、首を前に突き出すように伸ばして、このむせぶようななまめかしさを啜ぎ取ろうとするかのように

触角を忙がしげにびくびくと反応させながら立ち止ったり、又何か思い出したかのように急に動き出したりして肌をなめまわしていた。久世は蟻の呼吸がだんだん乱れがちにはげしくなっていくのを直覚的に感じたが、それと比例して今まで自分の内に盛り上って来ていた性欲がその熱と共に漸次下の方に向かって行って、全然それとは異質な不潔感が頭をもたげてくるのを意識した。自分の内に起るこの不潔感は一切何処からやって来たものか久世には了解出来なかったが、この瞬間的な感情の変化に呼応出来ない苛立たしさでこめかみが2、3度引離っていた。久世にはこの人形の肉体を最初に与えられたのが自分で、それを最初に犯したのが蟻であるという分りきったことが、何んだか非常に不合理なありそうにもないものに思えた。はたしてこんな不合理な事があってよいものだろうか、この場合蟻が出現してくる必要があってもよいものだろうか。こんな事をさせた神に対して激しい憎悪と敵意を感じたが、奇妙にもこの黒い大きな蟻に対しては何の憎悪も敵意も感じなかった。しかしこの憎悪も間もなく消え去ってしまったが、依然として彼の内を占めていたのは不潔感であった。この肉体に対する腹の底からの不潔感であったのだ。

自分の肌をなめまわしているのも知らずに失神している肉体、蟻の愛撫に対して何の抵抗も試みないばかりかかえってその愛撫を喜んでいるように全身を波打たせながら痙攣している肉体、そんな肉体に久世はやりきれないほどの不潔と嫌悪を感じないではいられなかった。そこにあるものは最早美しい処女の肉体ではなかった。淫売婦にも見られないような淫らな脂ぎった肉欲の塊にすぎなかった。肉欲の塊がこの地上で呼吸しつづけているにすぎなかった。久世は唾を吐きたい衝動をやっと抑えて、荒々しく右腕を掴んでなまこのように正体のないからだを引き起し、顔もみないで温泉場の診療所に担ぎ込んだのだった。

(筆者 医学科1年)

非バルビツール系新睡眠剤

バ ラ ミ ン

製 造 元

ド イ ツ ・ シ ェ ー リ ン グ A G

輸 入 発 売 元

日 独 薬 品 株 式 会 社



☆やっど原稿を全部印刷にまわしてホツとしたと思ったら次には試験が待っているということになった。編

集は難しいが面白くもある。昼間は方々を歩きまわり、夜は到着原稿を検討する。積み重ねた辞書類、原稿の束、原稿紙。ココアのコップまで並んだ机の上で深更まで厄介な仕事が始まる。頭が原稿のことで一杯になると容易なことでは寝つかれない夜もあった。編集会議ではのべつ意見が衝突して猛烈な論争が始まる。安眠妨害の苦情が下宿のオバンケルから出たりした。(京田) ☆兎も角あみこすがり刷り上ったことだけでも大変嬉しい。12月から具体化して2月に出たことはまあ学生としては連攻の類に入るだろう。原稿について一々批判などとてもない話だが、ラジオ・テレビ・週刊誌に麻痺しているのか、皆言いたい放題式文章は全くうまいのに、肝腎な責任ある意見の発表、滲み出る様な経験、構想を練って作った小説といったものが貧弱なのが気になる。この点草野君の「思うことなど」医学科の吉井君の「黒い蟻」はその意欲に敬意を表す。又誤字、不明の箇所は編集部で責任の持てる範囲内で訂正した。最後に紙数の関係で割愛、一部修正の止むなきに到った方々に謹んでおわびする。(村田) ☆雑誌を作るということは大変なものだ。小生営業部長兼外交員(?)を押しつけられて主に資金集めを担当したが全く難しい。何事をするにも先立つものは金であるそうで我々の雑誌もがり刷りから、だんだん話が大きくなって酒版でやるようになったので、こりゃたまらんと奮起したわけだ。この所10日間位ぶつつづけ一番丁面に広告集めに出て足を棒の様にしてみわり(もちろん授業は主観的の休講で)夜は夜でK君宅で編集会議だからいいかげん疲れた。だが足まめにまわると何か報われるもので、広告は何とか予定額にこぎつけ、色々まわっているうちになれない我々をかえって指導激励して

くれる会社もあって全く良い社会勉強となった。1年毎に我が薬学科の人数もふえて運営も楽になるだろうが、じみなの、しかし楽しい経営面の仕事を進んでやってくれる人がいてほしい(高橋) ☆一冊の雑誌。めじろ押しに並ぶ我々の作品。その出来ばえたるや必ずしもすばらしいものとは言えないかも知れない。しかし、それでも良いと思う。「雑誌を出すこと」これこそが雑誌を編集する者にとって又我々仲間にとって最も重要なことだと思ふからである。1号が出てこそ始めて2号があり、3号があるのである。将来さらに大きく発展するであろう「あみこす」の第1号の編集に携わった者としてその喜びもさることながらその責任の大なることも痛感せざるを得ない。(高石) ☆雑誌の性格がはっきりしていない現在、出来るだけ多くの人々の声を集めることによって何か良いモノがエキストラクトできるのではないかと考えていました。このような主旨のもとに例の印象断片の原稿を集めたのですが、一部に非理解者がおり原稿をいただけなかったことは残念だと思うんです。秀才であるみなさんはあまり学校で馬鹿話をされない傾向があると思うんです。印象断片の場を利用して“あのヤロウはあんなことを考えてヤガンダナ”なんかと知ることにはある意味で有意義であると思うんです。各人好きなように利用してくればそれで第1回編集員としては充分です。(荒川)

〔薬学科一年の経過〕

○4月30日：入校式 ○5月29日：本部学生食堂で第一回顔合せコンバを三岡先生を招いて開く。(出席38名)
○この頃とみにソフトボール熱あがる。○6月30日：同好者13名山寺・作並方面にハイキング。○9月下旬：前期試験。○10月26日：富沢運動会にて医学部2位入賞。○11月1日：統一行動デーに於ける中央委のストライキ決議に反対。○11月16, 17, 18日：東北大学50周年記念大学祭：音楽祭に初陣賞獲得。○12月14日：江陽会館にてガイダンス兼ティーパーティー(黒屋、相沢、一色、岩口、三岡、津村、菅原、金田各先生御出席、学生39名出席) ○2月20日：あみこす発行

編集スタッフ

○荒川睦 ○京田守弘 柴田徹一 ○高石勝夫 ○高橋威夫 中屋建介 野尻務 林 春江 福島英明 水浦道直 ○村田正弘 百瀬和孝 (○印責任委員)

◇サルベリン 高濃度サルソ製剤

◇チーゲン 非特異全免疫元剤

(キニーネ配伍)

製造販売 日新薬品株式会社

本社 工場 営業所
東京日本橋 山形市香澄町 山形市・仙台市

あみこす

1号

1958年2月15日 印刷
1958年2月20日 発行

発行者 東北大学医学部薬学科
編集責任者 京田守弘
印刷所 KK 針生印刷製本所
仙台市花京院通39
電話(2)3388(2)6644

精神神経安定剤



第一製薬
東京日本橋 文獻進呈

代表的な国産トランキライザー

アトラキシン

(一般名メプロバメート)

- ★精神的緊張にもとづく不安・焦燥・興奮感を除き精神を安定させ能率をあげる。就眠には不安興奮を除去し安眠をもたらす。
- ★筋肉緊張をほぐす。抗痙攣作用を持つ特有の鎮静作用は肩こり、腰痛、筋肉痛等に、又癲癇の特発性小発作等種々の症状にも有効。
- ★アトラキシンはバルビツール酸系、非バルビツール酸系の鎮静催眠剤とその構造及作用機序を異にしており、昼間服用しても催眠作用がない。

(1錠 0.2g) 12錠 200円 30錠 450円 末 25瓦 100瓦 500瓦

低分子6% P.V.P.製剤

解毒・利尿

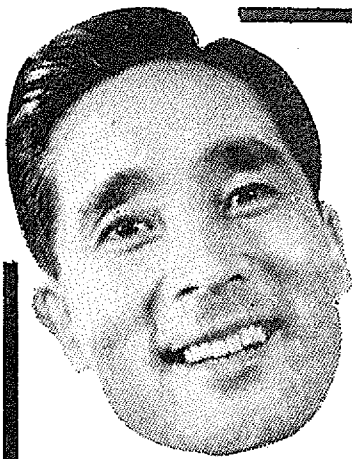
PLASGEN プラスゲン・L

文献贈量 50cc 5管 ・ 100cc 5管

薬物・細菌、ウイルス、生体内の各毒素を吸着して、腎より排泄する作用や水分と結合して、尿量を増大せしめ、浮腫を消退せしめる、作用の強い低分子(分子量平均 13000)の製剤です。バルビツール酸中毒、蛇毒の他、幼児自家中毒、疫痢、ジフテリア、小児麻痺、脳炎、百日咳、重症火傷、放射線中毒、慢性・全身性湿疹の解毒等広範な適応を持っています。



杏林薬品株式会社 東京都中央区日本橋本町4-6



疲れず
病気にまけず

体の調子はグンとよくなる!

ミネラル・肝臓エキス配合 総合ビタミン剤

ミネビタール

疲れる、手足がだるい、血色が悪い、病気になるやすい……こんな方はきっとビタミン不足です!

毎日ミネビタールをおのみ下さい。ビタミン12種、ミネラル11種の他、肝臓エキスで効果を高めた優れた総合ビタミン剤です。体内の臓器の働きを活発にして栄養を身につけ、疲れをなくすので体の調子はグンとよくなり、病気に対する抵抗力も強めます。

包装 30錠 (350円) 100錠 (950円)



東京 銀座 三共株式会社

高単位 新総合ビタミン剤

強力ミネビタール

13ビタミン・12ミネラル・肝臓エキス配合



メチオニンを配合・ビタミンを増量した

新製品!

特に消費量の多い重要ビタミンを増量し、また肝臓の働きを活発にしてビタミンの作用を更に有効化するため強肝薬メチオニンを配合しました。ビタミンとメチオニンの協力作用により効果は一層強力になりました

★総合ビタミン剤

強力パンビタン

価格 30錠 (350円) 100錠 (950円)

ウロコ印



武田薬品

ほかに … ミネラル入強力パンビタンM、パンビタン液・末
大阪市東区道修町 武田薬品工業株式会社 (P.12)